朋友に眞實のあるか、ないかハ、不幸に遭へば分明ります

○第六　譚　獅子の戀慕

昔〳〵或る山に住む獅子が樵夫の娘に戀慕〳〵て是非とも此娘の聟になり度と其の爺父に掛合ま〳〵た爺父ハ好まぬ事でハありますが否と言ハゞ獅子大王の憤怒に觸れ如何な災害に遇ハうも知れずと兎や角思案を巡ら〳〵漸く一つの計策を思ひ付ま〳〵て獅子の許へ參り「サテ此度御申込の一條ハ娘ハ勿論私に取ま〳〵ても誠に以て冥加至極難有事で御座ります、ま〳〵娘の願ひハ大王の恐ろ〳〵い御牙を拔き御爪を剪り賜ひ〳〵うへ添ひ奉らんとの事此段御領承下さるべ〳〵と恐る〳〵述べますと獅子王ハ猶豫せず直に牙を拔かせ爪を剪らせ、いよ〳〵婿になりたいと娘の方へ出かけて參りま〳〵た獅子も獅子でも牙と爪がなければ最早驚く事ハありませんソコデ彼の爺父ハ棒を押取り此

壓抑婿をたゝき出し〜まーた
最早や牙と爪を失つた後でハ如何思つても致方ハ御坐ひません

○第七譚　驢馬と狒狗

或人狒狗と驢馬を畜て居まーたが其驢馬ハ廐に繋ぎ豆と草を食ハせ置き狒狗ハ自分の傍に置て種々の美味を食ハせ時に依ると膝へ上げ頭を撫て可憐ゆがりまーた、ろこで驢馬の思ひますにハ狒狗ハ毎日〜美味を食ひ我儘勝手に遊び戯れ主人へぢやれてハ可憐がられる夫に引かへ、吾ハヤア用事ばかり多くて晝ハ木を挽かねバならず夜ハ車を廻さねバならず誠に苦〜い事だ、ほんに狒狗を見ると羨ひ吾も、ちと、主人へぢやれ付たなら可憐がられるだらうと或日羈絆を掉切り主人の座敷へ跑上り爬たり躍たり妙な容態をーて狂ひまわり果ハ、主人が食事をーて居る處へ飛込だから大變でず膳を踏碎き皿小鉢を蹴飛〜尚も此處ぞと圖に乘りまーて主人へぢやれてかゝり尾を掉て口を嘗め様と、する所へ折よく雇人共が駈つけて來てスハ主人の一大事と手々に棒を振り驢馬を打倒〜て半死半生の目に逢せまーた、そこで驢馬ハ斯う思ひまーた「吾ハヤア如何自分の本分を守つて居なかつたらう呆痴ぬ狒狗の眞似をーて、とんだ禍に遇た

本分を守らないと必らず禍に罹ります

○第八譚　家鼠と林鼠

或時家鼠が林鼠の處へ尋ねて往りますと林鼠の家ハ樅樹の下にあつて誠に奇麗に掃除がーて御座いまーた而ーて林鼠ハ客があるから草の根や木の芽を採て來て馳走を致〜まーた人でも馳走になるときハ自分の嫌惡な品でも好な風をーて食べるのハ常で御座いますが此家鼠も折角の饗應に遇たてとなれバ嫌惡ながら草の根や木の芽を食ま

したが何分味が惡うございますから常時の半分も食ずに濟し、其翌日は林鼠を我家へ招くことの約束をいたしましたが此家鼠は平生穀倉に住んで居りますから林鼠が來ますとやがて玉蜀黍や小麥や麵包の片碎や色々の馳走で饗應ましたスルト林鼠は從來斯樣美味食物は見た事も御座いませんから驚きながら家鼠に向ひ「汝は何處で斯樣な美物が御手に入りましたか」と尋ねますと家鼠は仕濟し顏で麵包や其外の食物が澤山貯へてある食料室の事又た其食料室へ忍入ることも誠に容易ことだなど言葉たくみに話し尙ほ御互に林中に住むより家中に住む方が幸福ですと話をして居ますと此時積重ねてある稿を踏越して何者か來る音がいたましたから家鼠は面色を變へ靜かにして下さいと言て息を殺して居ましたが何時の間にやら大きな古猫が鼠等の側に立て居まして、猫「吾が主人の倉へ忍入て居るのは誰れ

だ家鼠「ハイ小さな二疋の鼠です猫「汝等は何をして居るのだ家鼠「唯だ少々食事を致す所で御座います猫「此食物を食盡して仕舞所だナ家鼠「否々私共は此處に散つて居るのをホンノ少し許り食たので御座ます猫「吾は是れから汝達を食ふぞ家鼠「夫ばかりは何卒お許し下さりませ其の代り御話し申すことがございます猫「其話は如何な事だ家鼠「先頃一羽の小鳥が居ました至て奇麗な鳥でございましたが牀の上を飛び過ぎやうとした時落ちて居た一錢銅貨を拾ひ俄かに富豪になりましたから肉の小さい片を買ひ生て食るが厭さに暖爐にかけて焙りましたが又た其肉を冷さうと思つて戸口に置きましたが是は口中に火傷をしない爲めでございますスルト隙を窺い一頭の犬が來て其肉を奪取て喰ひました猫は鼠の語に續て猫「シテ吾も其犬と同樣に汝を奪て食はねばなるまい」との猫の言語を聞て居た林鼠は中々

敏捷ひ奴で直様其處を逃去り逸散に樅樹の下にある自分の穴の中へ身を隠しました林鼠ハ恐ろしい目に出會たと懲々して其後は腹中が餓ッて歩行も出來ない様に成るまで穴の外へハ頭出しもせず二度と家鼠の家へは往くまいと心を決めましたが、サテ家鼠は其後如何なりましたか働かずに旨い物を食やうと思ふと得で此様事がありました

○第九　譚　橡榊と蘆

或る河堤に大きな橡榊がありましたが大風の日に根から吹ぬかれ河を流れて行くと汀に茂つて居る蘆の無事で居るを見て「是は不思議なことだ彼様細くて軟弱ものが此大風に無事で居るとは吾の様な太くて強ひものが此災難に過ッたを考へると大差違ひだ」とつぶやくのを蘆がちらと聞取まして「橡榊様其疑ひハ愚といふもの何故といふに君は彼の大風に逆て何んでも彼でも曲るまいと力んだから吹倒されたのだ吾ハわづかの風にても伏したり曲たりして少しも風の心に逆ハないから何時も無難だヨ」

頁けて勝て

○第十　譚　蝙蝠と鼬

或日の薄暮に一疋の蝙蝠が地へ落ちて鼬に捕られた時「何卒命ハ助けて下さい」と頼ますと鼬ハ中々承知せず「鳥か何でも皆な私の敵だ」と放さぬから蝙蝠ハ大聲を擧まして「イヱ私ハ鳥でハございません鼠で御座ます」と云ふと鼬ハ「ウン鼠ならバ助けて遣ふと放ました其後此蝙蝠が過て又候地に落ると復た他の鼬に摑へられ「何卒助けて下さいと云ふと鼬ハ「我ハ元來鼠の敵だ」と云て中々承知ませんから今度ハ「ナニ私ハ鼠でハ御座ひません蝙蝠で御座ます」と云て再び難を逃れました

伶俐ものゝ其場合に依てうまく氣をきかせます

○第十一譚　佛像を運ぶ驢馬

有名な佛像を或寺院に納めんと驢馬に背負せ行列をして市中を通行ますと途中で諸人が掌を合せて拜むのを見て驢馬ハ俄かに鼻を高くして容易に歩を運びませんソコヅ圉夫ハ鞭をあげて「エー此畜生め汝が力む所ちやアねへ佛像が尊ひのだ

他人を尊敬するのを見て已れを尊敬すると思ふのは愚でございます

○第十二譚　狐と鶴

或狐が鶴を客に招き惡戯をしやうと思ひ疎飯を差上たければ今夕六時に御出下されたしと鶴の處へ言て遣りますと鶴は充分馳走にならうと思ひまして腹を飢て置て時刻を待かね狐の處へ參りました

スルと狐は淺い皿に極々細末に刻んだものを出してましたが鶴には迷惑な馳走です雀なればポツ〳〵拾て滿腹する事もありませうが鶴の長い喙では腹一杯食るのは容易でないから迷惑さうな顏をして少ツゝ食て居ますと狐は大きな口を開てペチヤ〳〵食ひながら「汝是れは御嫌でございますか御嫌でなくば何卒澤山召上つて下さいまし」と言ひながら自分バかりで大半食て終ました鶴はろく〳〵馳走を食べませんから食事が終ても腹は飢たなりでうれ相應の挨拶をして歸り其後二三日經つと鶴ハ返禮かたゝ狐を招き饗應を致しました

が其時の馳走は口の細長ひ大磁罈よ香〳〵い美が入れてございました

ゆゑ狐は其尖つた鼻さへ中へ入れることが出來ません途方にくれて居ますと鶴は「汝是れはお嫌ひでございますか何故汝は召あがりません」と言ふと狐は恨め〳〵さうに鶴の顏をながめて、禮もソコ〳〵

己が巣穴へ歸りまーた

他を謀ると我れも亦た謀られますから決ーて人を謀るやうな事はしないものです

○第十三譚　僞孔雀

一群の鴉が古寺の塔の上に住んでゐまーたが丁度その近處に花園があつて家禽が多く彼地此地を遊んで居ますと其中に孔雀が美ーい羽根を廣げて倨傲て居ますと一羽の鴉は彼の孔雀の樣に立派に身体を餝り友雅に見せびらかさうと思ひ花園へ下りて孔雀の脫羽を拾ひ自分の黑ひ羽根の間に挿ーし込み是見よと云はぬ許りの顏付で歩ゐて居ますと孔雀は言ふに及ばず其外鷄や鵝鳥の類までが鴉の高慢を輕悔み惡みまーて其挿ーて居る羽根を拔とり嘴をろろへて四方から衝てかへり到底花園から外へ逐出ーまーたゝろこで鴉は詮方なく元の塔へ歸り又々鴉の友こならうと思ひますと塔の鴉は彼奴が高慢な風体をーて居たからと惡みまーて中々其群に入れませんから一羽の雅は詮方なく獨り寂寥所に暮さなければならなひことになりまーた

天より授かつたる分限を守れば何時迄も幸福を受ますが其分限を守らおひと還て不幸福を被ふります

○第十四譚　挿鎖のおき門

或る農家の庭園から畑への通路に小さな門がありまーて此門の挿鎖が毀れまーたから此家の主人ゝ出入に氣を注で閉めて置きますが他の人々は左樣に氣は注けません又た主人が能く閉て置ても風か吹く度に内外へ蔽翼て果ゝ開たなりになつて居ます、そこで庭園に居る飼鷄の類ゝ自由に畑へ出る、庭外に居る羊の類ゝ我儘に庭園へ入るイヤ、ヤ毎日の始末に困りますので或日妻ゝ主人に挿鎖の修復をせ

ねばなりませぬと言へば主人ハ其修覆をすると六錢ばかり要るから浪費なことだ而して小兒等ハ平常何も用事ハないから飼鷄や羊の世話をさして置くが好いと捕鎖の修覆もせず其儘にして置ました、スルト一日豕欄に居た肥太た豕が其門を刎開けまして畑へ走り出て傍の森林の中へ逃込ましたが其時廐で馬を繋ふとしてゐた主人ハ之を見るより直に追かけて出で又た臺所で衣服に熨を當てゝ居た妻や火爐に懸けてある羹鍋の世話をして居た娘や小兒も下男も皆な逸散に主人の跡を追ふて駈付けましたゝ所ろが下男ハ餘り急いで垣を飛越へやうとして脚目を挫きましたから主人も迷惑ながら豕ハ打捨てゝ其怪我人を家へ連れ入れ妻と娘も其介抱をして居る中に羹ハ煮すぎ二枚の襯衣は焦げて着られなくなりましたスルト主人ハ妻や娘に「何故始末をして置かなかつた」と叱りながら廐へ行きますと馬ハ繋

でおいから子馬を蹴散して其脚を一本踏折てゐましたろうで主人の損失を計算すると下男が脚目を痛めて二週間の職業を休んだのと二枚の襯衣と馬子と豕とを失つたのでございました是ハ捕鎖の修復料六錢を吝んだからのことでありますす

○第十五譚　樅樹と木覆盆子

或日樅樹が自慢らしく木覆盆子に「實に汝ハ何にもならない木だ乃公でなければ家屋でも小屋でも建ハまない」と言ひますと木覆盆子ハ「成程左樣でございますが若し樵夫が斧や鋸を持て來て汝ハ何の樹だと尋ねましたら尊公ハ樅樹でハ御座らぬ木覆盆子で御座る」とれ答なさいませう

○第十六譚　犬と影

或犬が魚の骨を銜へて小橋を渡らうとすると水の中にも犬が魚骨を

銜へて居からいそれも我ものにせんと其魚骨に喰付くと己れが銜へて居た魚骨ハ水の中へ落ち其喰付たのハ自分の影で、ございまーした

大慾ハ無慾に似たりとハ此の事です

○第十七譚　兎と龜

高慢な兎が龜の遲々歩行てゐるのを見て「龜公此處へ來て乃公と競爭をーて見ないか」と愚弄にすると龜ハ迷惑なことだと思ひながら兎と並びまーたがイザと言はれても相替らず遲々とーて居ますから兎は益々馬鹿にーて「ナイ龜公乃公は一睡ーて行くからマア先きへ急ひて往なせへ乃公は直に追越ヨ」と假寐とするうち龜の影は見なくありまーたンデ高慢な兎も胆を消ーて急に躍起て約束の所へ往て見ますと龜は先刻に其處に着て待退屈をーて居まーた

迅速ものでも怠ると遲鈍ものにも負ます

○第十八譚　銅師と家犬

銅師が一頭の小犬を飼て置きまーたが其犬は何時主人が仕事にかゝるとスヤ〳〵寢て仕舞食事にかゝると起きますから或日主人は飯を食ながら「エー此畜生の懶惰者め」ト小言ながら魚骨を投てやつて「汝ハ鉄砧の音を聞くと寢て仕舞ひ食事の時には起やアがるな人も自分の利益になる事だと耳を聳てゝ聞ますがサテ友人の不幸などには其耳を聾ーて居ます何と自分勝手なものとは御座りませぬか

○第十九譚　兒輩と蛙

一群の兒輩が池の中に數多の蛙が遊泳で居るのを見ますと手々に礫を拾ひ投付けまーて多くの蛙を殺ーまーた其時死殘りの蛙の中で勇氣のあるのがヒヨツクリ水の面に頭を擧げ「コレ御坊サン惡戯をな

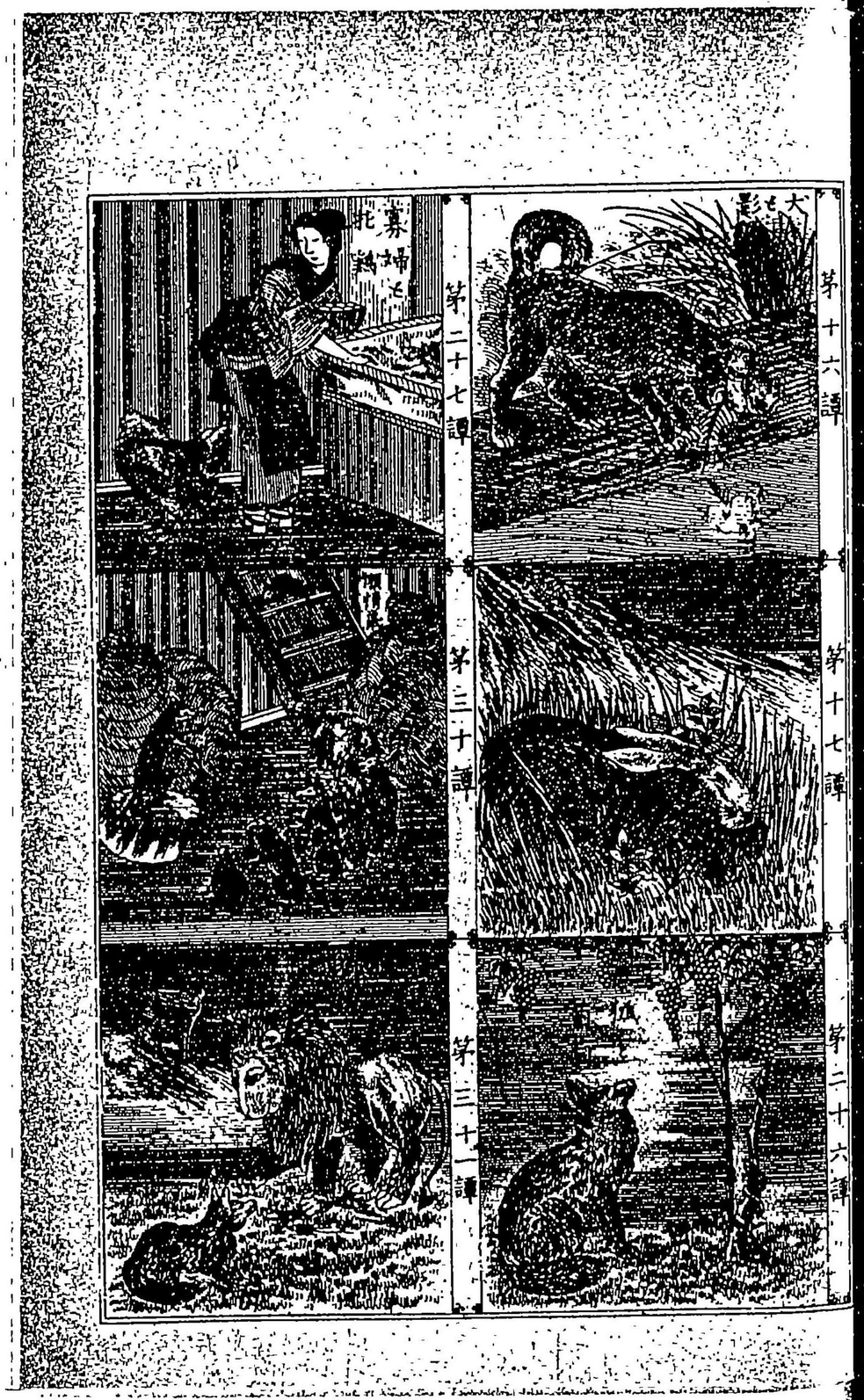
さるな貴童方の樂は蛙共の死去でございます

自分の爲めになることでも夫れが人の害になることなら些ト勘辨をつけねバならぬ況〜て自分の樂に人を苦めてはなりません

〇第二十譚　窮理學者

或窮理學の先生が霖雨が晴れて夜に入ると星が燦爛と見え出〜たから久振に天文を窺ひませうと仰向て星ばかり、ながめて歩行て居るうち大溝の中へ墜落だところ雨後のことゆゑ水嵩が増〜先生大難儀で首ばかり出〜頻りに助けを呼びま〜たから近所の人が聞け付て漸と引揚げて見た所ろ平常愛顧の先生ゆゑ懇切に介抱〜ながら「イヤ先生、尊公天文を御覧なさるハよけれどナト足下にある世の中のものにも氣をおつけなされたら如何でございまをよう

此先生より救た人の方が中々の窮理學者でございます



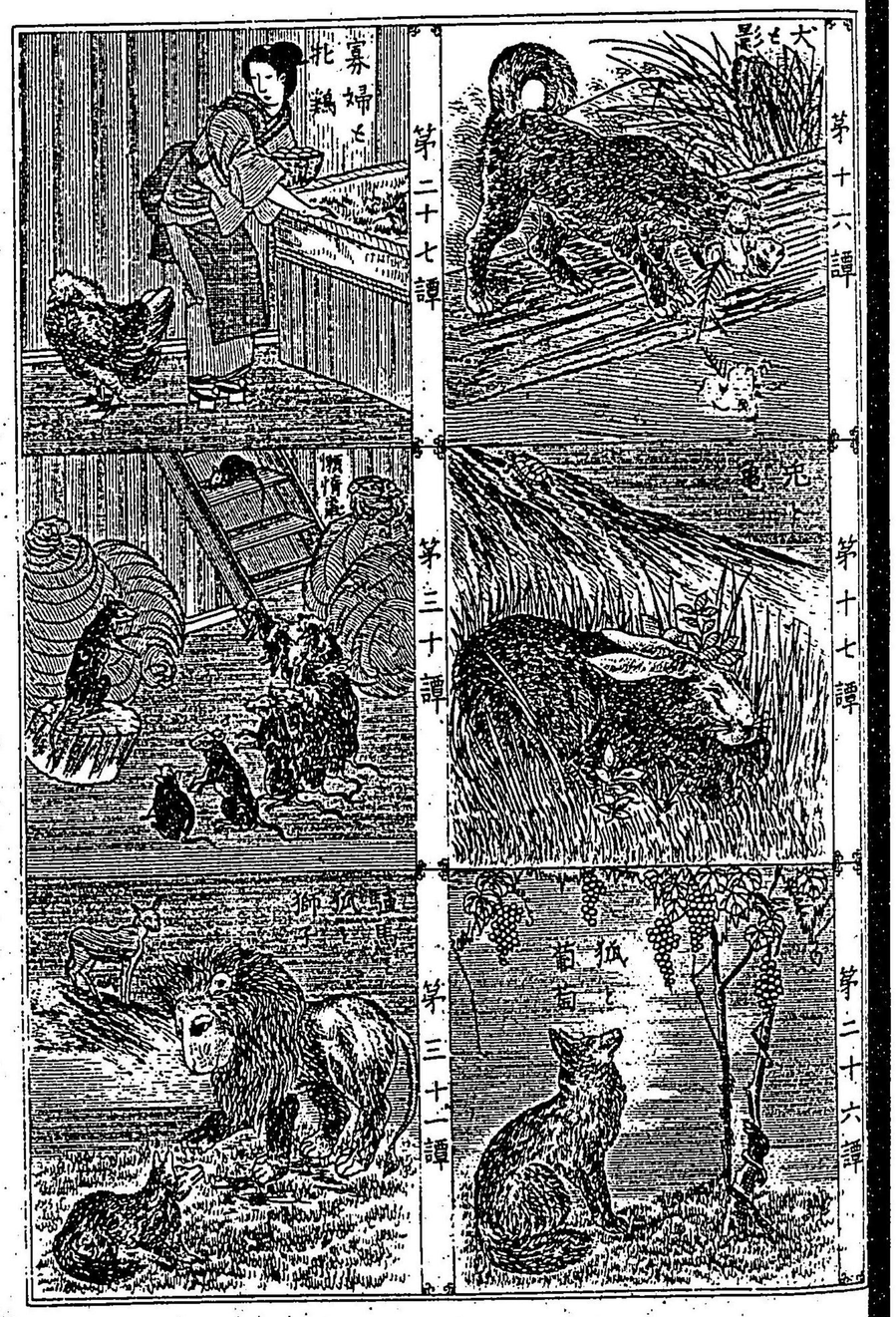
さるな貴童方の樂は蛙共の死去でございます

自分の爲めになることでも夫れが人の害になることなら些ト勘辨をつけねバならぬ況〜て自分の樂に人を苦めてはなりません

〇第二十譚　窮理學者

或窮理學の先生が霖雨が晴れて夜に入ると星が燦爛と見に出〜たから久振に天文を窺ひませうと仰向て星ばかり、ながめて歩行て居るうち大溝の中へ墜落だところ雨後のことゆゑ水嵩が增〜先生大難儀で首ばかり出〜頻りに助けを呼びま〜たから近所の人が駈け付て漸と引揚げて見た所ろ平常愛顧の先生ゆゑ懇切に介抱〜ながら「イヤ先生、尊公天文を御覽なさるハよけれどナト足下にある世の中のものにも氣をおつけなされたら如何でございまよう

此先生より救た人の方が中々の窮理學者でございます



○第二十一譚　賣乳孃と牛乳壺

賣乳孃が牛乳壺を頭上に載せて賣り歩行きながら「私は此牛乳を賣た金錢で又た鷄の卵を買ひませう、さうすると卵の數が三百程あるから仮令其中に不生や腐敗物があつても二百五十位は如何〳〵ても孵卵るはづゝうこで其雛子を飼立て相場の高價時分に市中へ持出〳〵て賣ると大層儲るスルと來年の一月には新裁の衣服を着る事が出來るが其衣服の色は如何のが好かまらん茶色が好らうかイヤ〳〵茶色は私には似合まい綠色が好らうか、左樣だ綠色ハ顏を白く見せるから私の衣服ハ綠色に限る、而〳〵て其衣服を着て市街へ出たらサゾ少年輩が賞るだらう私ハ其時ツンと〳〵て少年輩を尻目にかけてやりませうと一掉頭を掉と牛乳壺が轉落て微塵に碎けま〳〵た、うこで其孃は驚くまい事か今迄で考へて居た事が忽ち夢の樣に消へて仕舞ま〳〵た

何によらず事物は外へ氣をうつさずに爲ねばなりません

○第二十二譚　魚賣と門候

海邊を離れた都城に住居をして居る或る貴紳の家に或日婚禮を行ふとて馳走の獻立を爲し獸肉やら菓實の類は皆な備ひましたが其頃海へ大暴風雨で魚類が手に入りませんから彼是れ心配をして居ると丁度婚禮の當日或る魚賣が大きな比目魚を持て來ました、ろこで貴紳へ大慶で「代價へ何程ぞ汝の好み次第に取らするぞ」ト言いますと魚賣は頭を掉り「イヱ〳〵吾は代價は一錢も頂きません、併し其代り吾が素膚を百度鞭て下さいまして而して其百度の中一鞭でも欲けてはなりません」ト言ますから貴紳は「魚を賣て代價も取らず其上素膚を鞭てとは如何なる譯ぞ」と問詰めても中々承知ませんから貴紳は困り果て「ヨシ〳〵拙者は此比目魚は是非〳〵買ねばならないから汝

の望み通りにすると魚賣の脊を極々輕〳〵鞭て其數が五十に充ると魚賣は「旦那樣御待下さい殘餘の五十は分配て遣る人がございます其か當然でございます」と言ひまして貴紳は益々呆れ「如斯相伴を受る愚物は此世界にへない筈だが」と委〳〵其譯を尋ねますと「サレバで御坐ります其は別人ではございません旦那樣の門候でございます吾が先刻御門へ入るとき門候はヲイ魚賣汝は其比目魚を吾の主人に賣付たら其利分を半分與さないと此門を通さないと言ひまして其通り約束をして置きました」と譯を話しますと貴紳はハタと手を拍ち直に門候を呼寄せ暇をとらせまして魚賣にへ許多の褒美を與へました〳〵

意外の利を貪らうとすると意外の不幸に罹るものです

○第二十三譚　好戲の驢馬

或る家に飼て居る驢馬が一日飼主の屋根へ駈け上り跳ねまわりて瓦おどを踏み潰しますと主人ハ腹を立て有りあふ棒をおつとり其驢馬を打のめして嚴しく懲らしました驢馬は痛苦をこらへまして「旦那さん私は尊公のお樂みになると思つて骨を折て戯れましたのです何故と申せば昨日猿が此屋根で斯なことをして居ますと尊公は大層嬉しがつて居らッしやいました

○第二十四譚　蛇と鷲

或る時蛇と鷲とが諠譁をはじめ孰らも死物狂ひになつて戰ひました　が蛇は鷲に捲付き十中九絞殺さうとして居る處ろを一人の田舍漢が見付け鷲の苦んで居るを不憫に思ひ捲付て居る蛇を解て遣りますと蛇は此田舍漢が鷲の加勢をおたのゝ自分の念ひが叶はなかつたを無念に思ひ田舍漢が持て居た盃の中へ毒氣を吹込みましたを神ならぬ

身の田舍漢ハ知らず答はございません或る時之れに酒を酌で飲まうとすると兼て助けられた鷲が之れを見て飛下り田舍漢の手に羽翼を當てますと盃が落ちたのを爪に引掛けて高く空中へ飛び去りました

善ひことをしておくと善ひ報がございます

○第二十五譚　農夫と鶴

或村の畑に數十羽の鶴が下りて蒔付た種子を啄荒ますので農夫はやがて投石見を備へて鶴共を威しましたスルト鶴共ハ其石の動搖のハ風の勢だといふ事を知りましたから少しも恐れません悠々寛々と其種子を啄出て居りますので農夫ハ憤然となり今度ハ眞個の投石具を持出し石をつるして投付たから堪りません鶴は幾羽ともなく打殺されました、そこで生存てゐる鶴が相談をして「最早此所には居られねば小人島へでも行きませう今度ハ彼人等がれどすのでハない本氣に

なつたから

○第二十六譚　狐と葡萄

狐が或時葡萄園に來て赤く熟したる葡萄が鈴の樣に高い架から下ッて居るのを見て「アヽ旨さうだと涎を垂らしながら幾度となく其葡萄を取らうとして飛上りましたが如何しても屆きません、そこで狐は憤怒をたて「何だ此樣葡萄は酸ばいぞ人も自分の思ふ樣になれば譽める、ならねば毀る何と手前勝手なものではありませんか

○第二十七譚　寡婦と牝鷄

或寡婦が一羽の牝鷄を飼て居ますと此牝鷄は毎日卵を一ッづヽ産ゆゑ立陪の麥を喰はせたら二ッづヽ産むだらうと考へ吝氣もなく食物を與へましたヌルト鷄は丸々と肥へ羽も艶々しくなりましたが肝

腎の卵は一ッも産まぬやうになりました

○第二十八譚　國王と蛛と蠅

或る一國の王樣が世界に蛛と蠅とは不用のものだ余は何でも之を世界から追出てやりたいと思て居りました、然が此王樣が外國と大戰爭をはじめ或る時味方の敗北となッて森林の中へ逃げ込みましたが此中に隱れて居れは大丈夫だと思ひ長々の大戰爭で疲勞切て居られましたから不識一睡すると敵が是を見付出し幸ひ睡て居るところを一擊と劍を閃めかして狙ひ寄る途端に蠅が王樣の顔に泊つたので眼が覺め敵の來たのを見て忽ち崛起ましたから敵は其まゝ逃げ出しました、そこで王樣は其夜は洞穴の中へ隱れて居たところ其翌朝になると二人の敵が如何にもして擊取りたいと其處此處と探ねるうち一人の敵は「此洞穴の中に隱れて居さうだ」と言ひますと他の一人は「

イヤ此中には居ない何故と言へば此洞穴の入口に蜘の巣が張て居るから」と言ふのを王樣は身を縮めて聞て居るうち二人の敵は其處を通過して仕舞ひ王樣の命は蠅と蜘とが助けました

造物者の造へたものに不用のものはありません

○第二十九譚　牧童と狼

或る牧童が常々羊の番をして居ましたが日の永い時分で退屈したところから不圖惡戯を考へつき一番村中の人々を驚かして遣らうと大聲で「狼が來た〳〵」と村中を號呼巡りますと何れも其聲を聞付け「ザア大變だ」と鍬も鎌も投捨て〳〵牧童の聲をたよりに群集て來ましたが程なく牧童の惡戯と言ふことが解り皆な〳〵家へ歸りました牧童は之れを面白ひことに思ひ二三度も同じ騒動を仕出來て果は笑ひとなりましたが或日のこと眞物の狼が今度は眞個に出て參りまして

牧童を食殺さうと致しますから牧童は仰天して大聲を揚げ村中を巡廻り一生懸命に加勢を求めましたが村の人々は耳にもかけず「又た彼の牧童が惡戯をはじめたな」と出逢ふ者もなくトウ〳〵此牧童は狼に喰殺されました

平生虚言をつくものは眞實を言ても人が信じないから、まさかの時に大變おめに遇ひます兒童達は虚言を吐てはなりません

○第三十譚　懶惰鼠

數多の鼠が磨舍の一隅に巣穴をこしらへて居ましたが其中に懶惰鼠が居て其名ハグリップと言ひます或日老鼠が汝は今夜吾輩と食物の探索に出るかとグリップに問ひますと「私は知りません」と言ひ又た「サレバ此巣穴に留守番をして居るか」と尋ますと相替らず「私は知りません」と云て些少も頓着致しませんうてで老鼠が「是れグリ

ヤプ汝は左樣精神でゐると誰も後ゴは交際をするものがなくかるな愚鈍な奴だ」と意見を加へますと此懶惰鼠は何か考へた容子で容を改めまゝたが矢張り返答を致しませんソコデ又た老鼠へ「汝は如何いふ心算だ何故返事をしないか」と押〜て問ひますと相替らず「私は知りません」と言た限り徐々と其の場を立ち去りまゝた然るに或る日大風が吹き出〜此の磨舎がガタ〜動揺出〜て家根板が床へ落かゝるといふ騒動に老鼠を始め數多の鼠はブル〜震へながら此處を立ち去る相談をはじめ何處か大丈夫な家へ巣屈を替へ度とて氣の利た二三疋の鼠を探索に遣りますと歸つて來たは夜分でございまゝたが其鼠ともの話に「小屋へ少〜古ひが食物も澤山あり居間も一寸氣が利て居る所がある」とのことに例の老鼠が「サレバ其處へ直に轉宅をやうから皆な是れへ出て行列をせよ」と言ひますと數多の鼠へ聲

に應じて一同行列を正〜まゝたゝうてで老鼠へ其行列を見廻はゝ「皆な〜是れに居るか汝達は皆な轉宅することに決心〜たか」と問ひますと數多の鼠「ヘイ〜〜轉宅の決心でございます此處に居ては命のおいたとが能く解て居ます」との返答老鼠へグリップが別に階段の際に居るのを見て老鼠「汝は何の返答もないが勿論轉宅は同意だらうグリップ「何するか知れません」と答へまゝたゝうてで老鼠「夫れでは譯が別らないサレバ轉宅へ来あい心算りかゝ家屋が倒れかゝると轉宅するのは仲間の定例だが汝は左樣は思はないか」と言を別けて言へばグリップ「私は如何するか未だ決りません此家の倒れる迄にはまだ時間があるやうです老鼠「サレバ汝は此家に居るが宜い害を受るも自業自得ダグリップ「私は此家に居て好ひか解りません又た轉宅〜て好ひか其れも解りません」と怜悧な面色で二三語吐べりまゝたが老鼠は

汝の決心を待ては居られないから汝の勝手にしろと云ひ放ちまして一同に進めーの號令を掛けますと鼠の行列が磨舎から搖出し一ツづゝ階段を降りて行を見て居たグリップも頻りに首を傾け「乃公も轉宅したいやうだが左樣かと言て未だ決心がつかない此家は靜でもあり暖でもあるから乃公一人此處に居た方が好いか知らん」と言ひながら階段から今一度行列を見ますと早最後に居る鼠の尾がチヨ〳〵見へるばかりで到頭數多の鼠は此家を出て仕舞ひました、うてでグリップは轉宅するともせぬとも極らず一先づ元の巣穴へ引込みますと夜に入り益〻風が強くなりグラ〳〵家が搖れ出し今にも倒れさうにありましたから初めて恐怖いてとが解りましたが未だ出て好いか居て好いか心が決らず又た暫時其處に居ましたが流石のグリップも最早是まで諦めまして急に其處を出やうとすると出合がしられ

磨舎が倒れまして其翌日或人が磨舎の倒れたのを見に行くと從來數多居た鼠が一疋も居ませんから怪しく思ひましたが屋根の落重で居るのを取除けると一疋の鼠が死んで居て其身体は半ば巣穴の内に半ば其外にありました

グリップが今少し早く決心すると死ずに濟だのです人も決心は大事でございます

○第三十一譚　驢馬と狐と獅子

或る驢馬と狐が約束をして狩に出ましたが其途中で獅子に出會ひ狐は身に迫つた災難を免れんと思ひまして直に獅子の側へかけつけ低い聲で「大王、私をお助け下されば驢馬はれ手に入れさせませう」といふ獅子は其事を承知すると狐は驢馬を誘ひ逃げにくい絶所へ連て來まして「サア大王」と言ふと獅子はもう驢馬の方へ取逃す氣遣ひ

なりと安心をして先づ狐に取てかゝり終に兩獸とも餌になりました
朋友を賣る不義ものは上帝が覽てでざる故助かる筈をでざりま
せん

㊀第三十二譚　守錢奴

慾兵衛といふ守錢奴い衣類や汁器は火事や盜賊の難に罹ることあり
田地や屋敷は人に貸さかければ利分がなゝ寧ろ殘らず賣却して金貨
で土藏へ秘藏ておくのが上分別ダと考へ其所有物を盡お賣拂ひ土藏
の中に細深い穴を堀て金貨を鈎り隱して置き毎日出して顏を見てい
あるぞ〳〵と樂んで居ますと家に使てゐる一人の職工が怪みまして
或日主翁の跡を尾けて行くと金貨を穴から出したり入れたりして居
るのを確と見届け天の與へと嬉びまして主翁の立去つた跡に行き其
の金貨を殘らず窃み取て逃去たとも知らず主翁は其翌日も例の通り

御見舞申さんと往て見て吃驚仰天思はず大聲を揚げて泣號びますと
近所近邊から大勢駈て來て段々其譯を聞糺し漸く其顚末が分ります
と或る識者が「イヤモウ御泣なさるな左樣云ふ譯なら金貨の代りに
石でも瓦でも入れて置て金貨だと思つて毎日御見舞なさい寧ろ使は
ぬものなら金貨も石瓦も同樣で御座る
金銀い握て居るばかりでは其德いない使へばこそ價のあるもの
です

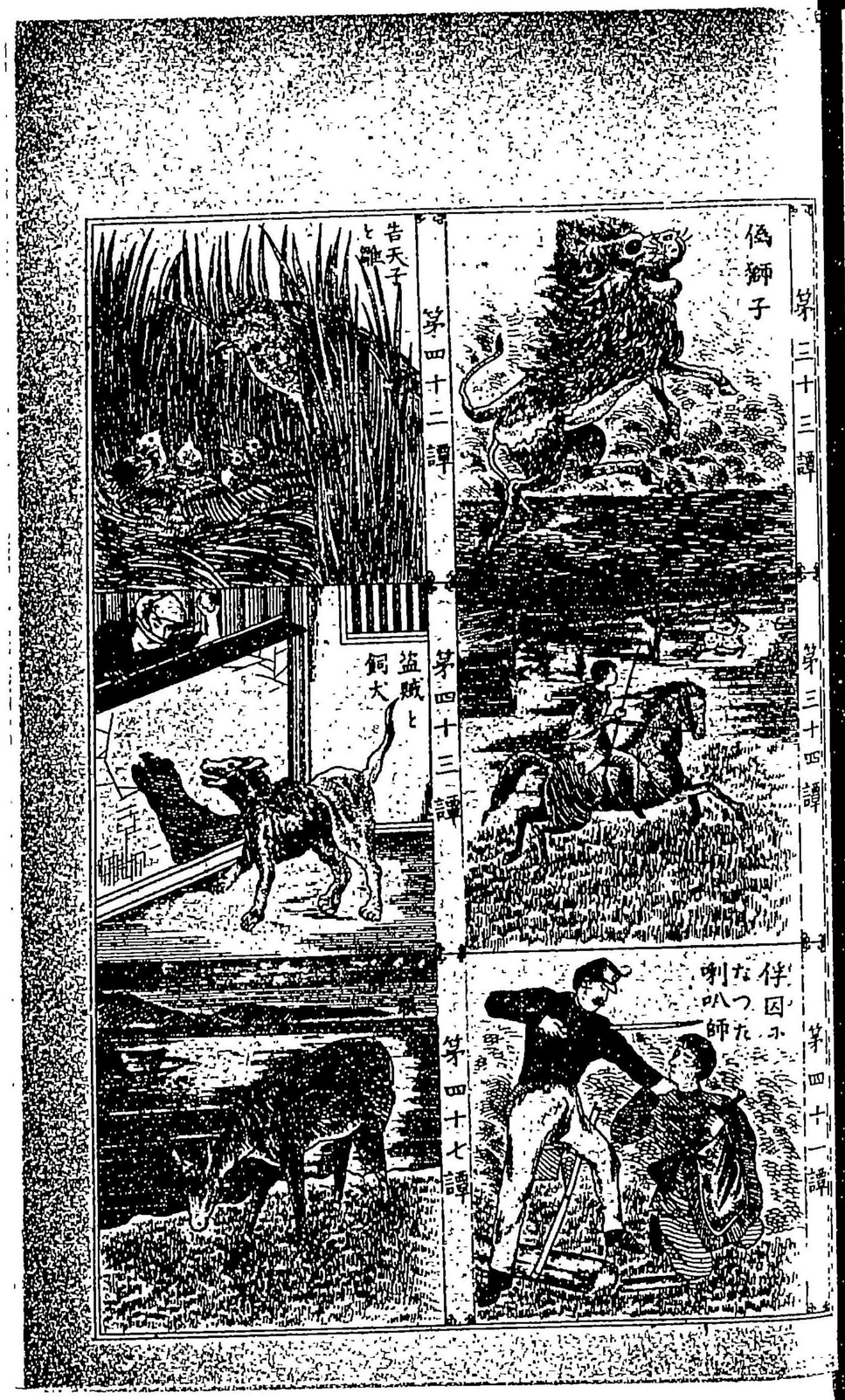
㊁第三十三譚　僞獅子

或る驢馬が强ひ獅子の眞似をして獸類の者を驚かさんと獅子の皮を
被て威張つて歩きますとやがて狐に出會まして其時驢馬い此奴中々
狡猾だから充分膽を潰ぶさして吳んと假聲を使つて一聲高く吼ます
と狐い熟々樣子を見て「知て居るぜ驢馬君、我い汝の嘶聲を聞かなか

つたら眞實の獅子だと思つて贈を遺したに相違おい身に不相應なことを望むものゝ大抵此狐の如く仕損じます

○第三十四譚　馬と鹿

或る野馬が廣い牧場を自分獨りの居處と定め如意に徘徊て居りますと此處へ一頭の鹿が來まして牧場の草を喰荒らしました、ろこで野馬へ「惡ひ奴だ已れ何時か復讐をして遣るぞと考へましたが是れぞと言ふ機會がないので某人に何卒彼奴を懲して下されと賴ました、スルと某人へ「然らば我が汝の口へ轡を銜め汝の脊へ乘ると鹿を懲らすは容易いことだと言ひますと馬へ直に承知して其人を乘ました、が其後も自分の身を自分で自由にすることが出來なくなり日頃の望みを遂げもせず何時迄も乘馬にされて廐へ繫がれることになりました



つたら眞實の獅子だと思つて贈を遣〜たに相違ない
身に不相應なことを望むものハ大抵此狐の如く仕損じます

○第三十四譚　馬と鹿

或る野馬が廣い牧場を自分獨りの居處と定め如意に徘徊て居りますと此處へ一頭の鹿が來ま〜て牧場の草を喰荒ら〜ま〜た、うこで野馬ハ「惡ひ奴だ已れ何時か復讐をし〜て遣るぞと考へ〜ま〜たが是れぞと言ふ機會がないので某人に何卒彼奴を懲〜て下されと賴ま〜た、スルと某人ハ「然らば我が汝の口へ轡を銜め汝の脊へ乘ると鹿を懲らすは容易いことだト言ひますと馬ハ直に承知〜て其人を乘ま〜たが其後ハ自分の身を自分で自由にすることが出來なくなり日頃の望みを遂げもせず何時迄も乘馬にされて廐ゑ繋がれることになりま〜

○第三十五譚　蟻と鳩

一疋の蟻が水を飲まうと～て或る小河の上りに來ますと足が滑り込んで既に溺れ死うと致～ました～たスルト其側の樹に止て居た鳩が蟻の不幸を見て慈悲心を起～一枚木の葉を取て蟻が苦んで居る水の上へ落～て遣りま～たから蟻ハ喜んで其上へ這上り岸へ流れ付て危ひ命を拾ひま～た、さかるに何時の間にか捕鳥奴が來て居て、こつそり、ひるてんを張て其鳩を取らうとするを見て蟻ハ安からず思ひイキナリ捕鳥奴の踵へ嚙付ますと思はず飛揚る拍子に其響で、ひるてんが剝然落た、うこで鳩は飛んで去けま～た

我、他に善を施せば他も亦た我に善を施～ます

○第三十六譚　燕と蛇と裁判所

或燕が裁判所の軒先に巣を造へて居ま～たが母燕か餌を拾ひに外へ

往つて聽て歸て見ますと未だ巣立の出來ぬ雛を蛇に呑まれて居たので悲〜さ云ふ許りなく泣てゐますと隣巣の燕が悔みに來て親切に慰め「コレサお燕さん其樣にお泣きでおいヨ何もお前さんばかりが初めて雛を取られたと云ふのでもありません」と云ひますとお燕は涙を拭ひ「實にさうでございます併し私の悲ひのも何も私の雛が取られたばかりのことでもありません非道に逢つた人達が御裁判を願ひに參る難有此御場所に佐みながら如斯不法のめに逢はされたかと思へば夫が口惜うございます

燈臺本闇の譬へで裁判所近邊にも曲者が居ないとも申されませんん

○第三十七譚　獅子と歳神と象

或山に住む獅子が歳神へ參詣して平生の不平を鳴らし「南無歳神さま〜私の勢力は猛く形貌は立派で搏噬にも勇氣もあり加之私の鋭き牙や利き爪も持て居て諸の獸類には王樣〜と崇められますが如何いふ譯か庭鳥の鳴聲を聞きますと直に怯氣が付て之を禁めることが出來ません誠に殘念至極でございます」(獅子の庭鳥の鳴聲を聞くと恐れて平生の勇氣忽ち失せると云ふ說あり)と怨め〜氣に歎きますと歳神の「其方の益もないことを歎て余を困らすぞ余の余の權力のあらん限り其方を護りて居るぞ其方の勇氣の庭鳥の鳴聲の外にも恐るゝ事のないから其樣に强慾を願ふものでのない」と慰め給ふと獅子の悲痛堪りかね呟出〜て自分の憶病を殘念がり寧そ死だが增と決心〜て歳神樣の所から歸る途中圖らず象に邂逅ひ先づ互ひの挨拶もすみ四方八方の談話をして居ると獅子の象が頻りと耳を顫ひ顫かすのを見て「象さん貴君の何故其樣にたゞず耳を顫か〜てお出な

さる」と問へば(此時蚊が一疋象の頭に止て居ました)象は「貴君は拙者の頭に居るブン〳〵云ふ小な蟲を御覽でせう若し彼の蟲が拙者の耳の中に飛込ますとサア大變ダ夫れが拙者の運の果だ直に拙者は死で仕舞ひます」と(象の耳に蚊が這入ると象は忽ち死ぬと云ふことも昔時から言傳へた說です)と云ふと獅子は驚愕して「ア、左樣で御座ますか貴君の樣な大きなれ方でも彼の小さい蚊に恐れてお出なさるか、うれしやア私は モウ悔々思ひますまい私は貴君よりも未だ餘程宜ひ方で庭鳥は蚊にくらべると大きいから

我身が不幸に罹ふとも他の不幸に比べて見ると、また歎くにも足らぬことと世間に澤山あることでございます

○第三十八譚　蚤と老翁

或嫌蚤の老翁が脊中へ手を廻して何か顏をまかめてモガ〳〵て居ましたが、やつと一ッの蚤を捕へ「乃公の身体を恐れ氣もなく食ひながら捕へやうとすると如斯に骨を折らせた奴は誰れだ」蚤「旦那、命だけは助けて下さいまし何卒遺すことを堪忍して下さいまし私は左樣に甚ひ害をしたのでは御座いません」と詫れば老翁は笑ひながら老翁「汝は乃公に害をしたよ相違ない其害が多くとも少なくとも許してはおかれぬ奴だト爪の頭でプスリ

我身を保護るためには些少の害でも許すことは出來ません

○第三十九譚　牧者と羊

或日牧者が其飼羊を牧場の方へ追て行く途中で不圖槲樹に橡實の多く生てゐるのを見付け自分が着て居た半纏を脱で横天てゐる枝の下に廣げ其樹に上りて橡實を搖落すと下に居る羊が落ちてくる橡實を喰ひ廻り何の氣も付かず下に廣げてある半纏を寸斷〳〵に食裂

きまーた、すると牧者が樹から下りて此體を見て大きに怒り「エ、此恩知らずめ、汝ハ外の人達にハ衣服にある毛を供りながら汝を養てやる己れの衣服を如斯に喰ひ破つたナ

自分の不注意ハ忘れて他の不注意を咎めることが、まゝでございます

○第四十譚　農夫と林檎樹

利己平と云ふ農夫の所有畑に一本の林檎樹がありまーた此樹ハ年來少の實も生ないで、たゞ雀や鳥斯の寄合場となり利己平の爲めにえ些少の利益にもならないので之を伐倒さんと斧を以て其根本に向ひ一打強く打込みまするとと、雀と鳥斯か驚愕ーて「此樹ハ私共の生息所ですから何卒伐らずに殘ーて置て下さいまー、其代はり私共が歌を唄たり踊を躍たりーて主公のお相手をーてお勞を慰めますと」賴みまーても利己平ハ中々承知せず又た二三度斧を打込みまーた段々伐るに從ひ其中に空穴があつて蜜蜂が澤山蜂蜜を儲めて居まーた、うこで利己平ハ之を嘗一嘗て試て舐舌をーながら「ア、此樹ハ神木に違いない」と忽ち斧を投棄て其以後ハ大切に培養まーた

自己の利益となる事のみが其人の心を動ーます

○第四十一譚　虜となつた喇叭手

或國王の軍、敵の爲めに敗られ其喇叭手が虜となりますと頻りに宥免を請願ひ「何卒私ばかりを助けて下さりませ私は今まで貴軍の人を殺ーた事は一回も御座いません御覽の通り手には唯だ喇叭一挺持たばかりで刃とてハ何も持ては居ませぬ」と云へば敵は冷笑ひ「夫れだから汝ハ早く殺さなければならないのだ汝ハ自分で戰ふ勢力もないくせに他を鼓舞てハ教唆やアがらア、如何ーて殺さずに置くもの

〜畑主が近所の衆へ一任て置くくらいでハ未だ暫時ハ間がある、うんなに狼狽にハ及ばぬ」と云て出て行ま〜たが其次の日も親鳥が出た後へ畑主が見廻りに來て「麥の實入ハ十分だのに未だ苅入にかゝらぬか、モウ時日ハ過されぬ迚も近所の奴に任せてハ置けぬ親類へ手傳を賴んで惣掛りで苅らずばなるまい」と獨語をいひながら遙か遠方の野邊に居る息子の鍬太郎を呼んで「コウ從兄の鎌助や伯父の泥作に明日ハ來て麥苅の手傳を賴むと言て來い」と言捨てゝ歸りますと引違へて母鳥か歸り雛が皆なく〜顏色を變て居るを見て「汝達ハ何か心配な事があるか」と問ふと雛ハ口々に畑主の言た事を告げま〜た其時母鳥ハ些も騷ぐ氣色もなく「ヨシ〜夫れじゃア未だ氣遣ひハないアノ親類達も自分の苅入時で繁忙いは同じ事此後畑主が來て何ぞ言たら油斷をせずに聞取て話すのダヨ」と言ひ聞けま〜たが

か人を教唆て惡事を、させるものゝ自分で手を下すものよりも罪が深ふでございます

○第四十二譚　告天子と雛

麥の穗か黃色になる頃其細中に告天子が巢を造て居ま〜たが母鳥が何時でも餌をあさりに出る時にハ「留守の間にあつた事ハ何事にならず母が歸て來た時必らず話すのダヨ」と雛に言付て置きます、うて で或日母鳥ハ例の通り出て行た後へ細主が出て來て畑中を見渡〜「モウ麥も能く實が入た誰れか近所のものを賴て苅入をせずバなるまい」と獨言を云て歸て往きま〜たが聽て母鳥が歸て來ると雛共ハ母をとりまいて「今日畑主が云々言て居ま〜たから何處へか私共を連れて退て下さい」といふと母鳥ハ「なるほどモウ麥の苅入時ダ、ま

サテ其翌日も母鳥が留守になつた時分又候畑主が出て來て「麥の穗が屈むほど重くなつたのに誰れも苅て居るものハないハテ鎌助や泥作ハ何をゝて居るかまらん怪ゝからぬ」と獨語ながら大きな聲で息子の鍬太郎を呼び出ゝ「モウ鎌助や泥作を待てハ居られない汝を今夜中に誰れでも搆はぬから苅人を雇て置け明日ハ屹度自家も來て苅入れるから」と言て歸りまゝた、斯る次第ゆゑ雛共ハ母鳥の歸巣を待ちかねて「今日ハ云々畑主が言ひまゝた」と母鳥に告げると母鳥ハ眉をひろめて「ウム左樣かろれじやア今が巣立をする時ダ

何でも人に一任てなくやうでハ事が運びませんから世間の信用も薄ひものでござるます

○第四十三譚　盜賊と飼犬

一人の盜賊が、富有の某邸へ忍入らんと高塀を越ゝにかゝると其邸

の飼犬が目を覺まゝて吠へまゝた、ろこで盜賊ハ袂から摶飯を出ゝて犬に投げて遣ると犬ハ益々大聲になり「其樣ものハ入らぬゝ」最前から怪い奴ダと思つて居たが此樣な賄賂を出すからハ、イヨゝ曲者に違ひない

賄賂ハ心に邪曲ことのある證據でございます

○第四十四譚　旅人と楓樹

夏の三伏に二三人の旅人が正午の暑氣に堪へかねまゝて路傍の楓樹の木影に休みまゝた下ハ青々とゝた芝生何れも汗を拭ひ心地好さにコロリと横臥になり梢を見あげて居りまゝたが「なんだ此樣花も咲かず實もならない樹は何の爲めにもならぬ」と口々に惡く言ひます

と楓樹ハ大きに憤怒り「お前さん方ハ何を言ふのダ今ま我の厚庇を被つて居るくせに何の爲めにもならないなどゝ吐ゝおるな此の恩知

らずめ

恩を知らないものゝ世話になつてゐるッイ其場の恩が目に見ゑぬものでございます

○第四十五譚　餐婦と綿羊

或る餐婦が一頭の綿羊を養て居ましたが其毛を成丈け多く得りたいものと考へ人に任せずに自分で皮にかゝるほど深く毛を剪みますと羊ハ痛さを堪へかねて「何故汝ハ其樣に私を慘酷にあはせます何も私の血が毛の重量を增すものでもあいに、若し汝が私の肉を欲しく思召すなら寧ろ一おもひに殺す屠丁の手にお掛けなさい又た毛が御入用なら血を出さずに剪む剪丁へ御賴みなさゐョ

半熟半練でハ何時拙陋な仕事しが出來ぬものです

○第四十六譚　狼と羊

狼が或時羊の家へ使者を遣しました其口上に「何時までも御互に讐敵の思ひで居るのハ私共に取てハ善くないことゝは思ひますが畢竟御前樣の方にハ彼の犬と云ふ奸惡があつて私共を吠罵りますから何時も御互の騷動を惹起すのでございます速に彼の犬共を追退て下さらばお互ひに意恨ハない筈然る上ハ御懇意に願ひませうとのことに羊ハ狼の謀計とも知らず成程狼殿のれ言辭ハ甚だ最なことだと直に犬を追出しました其後狼ハ羊を護るものゝないのに乘み一頭も殘さず羊を喰盡しました

狡猾なものゝ言辭ハ容易に信ずることハ出來ません

○第四十七譚　片眼の鹿

或日片眼の鹿が海邊に出て見ゐぬ方の眼を海の方に向り見ゐる方の眼を陸の方に向け「是れなれば假令ひ狩人が出て來ても獲らるゝ氣

づかひなーだ」と安心をーて草を喰て遊んで居ますと武士が二三人舟遊びに出かけ彼方此方と漕まわり海岸に鹿の居るのを見つけ持たる弓に矢をつがへヒヨーと放てば誤たず太股深く貫けバ鹿ハ堪らず倒れながら口惜涙に太息を吐き嗚呼吾ほど運の微いものハないぞ、何でも危殆だと思つた方ハ安心で大丈夫だと見込んだ方から敵が來た哩

災難と云ふものハ何時も思ひもつかぬ方から來るものですから油断ハなりません

○第四十八譚　鴉と水瓶

夏の日或る鴉が咽喉が乾いて堪りませんから遥か向ふに水瓶のあるのを見つけ早々飛下りて見ると水が少なくつて喙が届かないので當惑をーて居まーたが不圖思付いて傍にある砂石を喙へて一ッづゝ瓶

の中へ落ーますと水量が漸々に增ーて來て終に喙が水にとゞき思ひのまゝに水を飲んで渴を免れたさうです

力の及ばない處で智慧ハ出るもの、ソシテ功業が出來るのです、

志て見ると窘迫といふ事ハ何時も功業の母でございます

○第四十九譚　狐と伐木者

一頭の狐が狩人に追かけられ、伐木者が小屋を掛けて居る所へ逃て來て、木を伐て居るのを見て「旦那御邪广ながら暫時隱れさせて下さい」と云へば伐木者は点頭「彼處が好い」と小屋を指ーますから狐も喜んで其處へ逃げ込み片隅に蹲踞てゐますと、やがて馬に乘つた武士らーい人が二三人駈けて來て「ヤイ伐木者狐が此方へ來やしないか」と問ひますと木伐者ハ「否」と云ひながら小屋の方へチヨイト指を向けまーたが狩人ハ悟らないで「それぢア違ッたか」ト鞭を揚げて

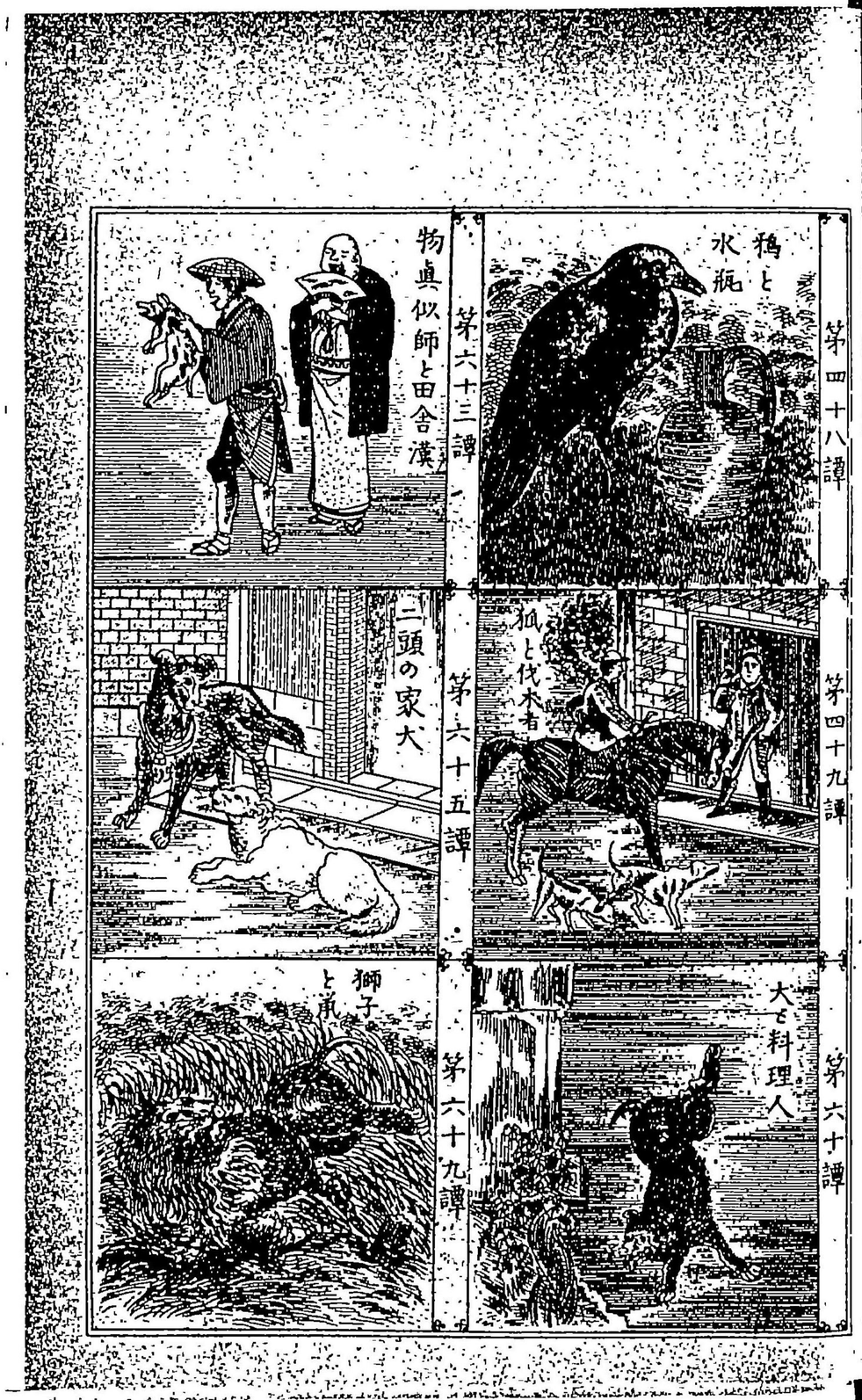
駈け出〜ま〜た、うこで狩人の影が見へなくなると狐ハ「ヤレ嬉しや命を拾ふタ」ト跳出〜て往くを伐木者が見咎め「ヤイ狐畜生め助けてもらつて禮も言はないで、行く奴があるものか」と云ひますと狐ハ後面を向き「親切な旦那さんぢ、ヤ若〜汝の指が口のやうに親切なら、如何〜て挨拶をせずに往きませう

眴目でも口や手でするほどの害が出來ます

○第五十譚　兒蟹と母蟹

母蟹が兒蟹の歩行樣を見て「ナゼ御前は其樣に横斜に歩くのだ〜」と叱りますと兒蟹ハ「阿母さん、あなたの行歩方を御見せなさい私ハ阿母の眞直な歩行方を見習ひませう

人よも自分で不正ことをおながら人の不正ことを咎めるものがよく、ございます、



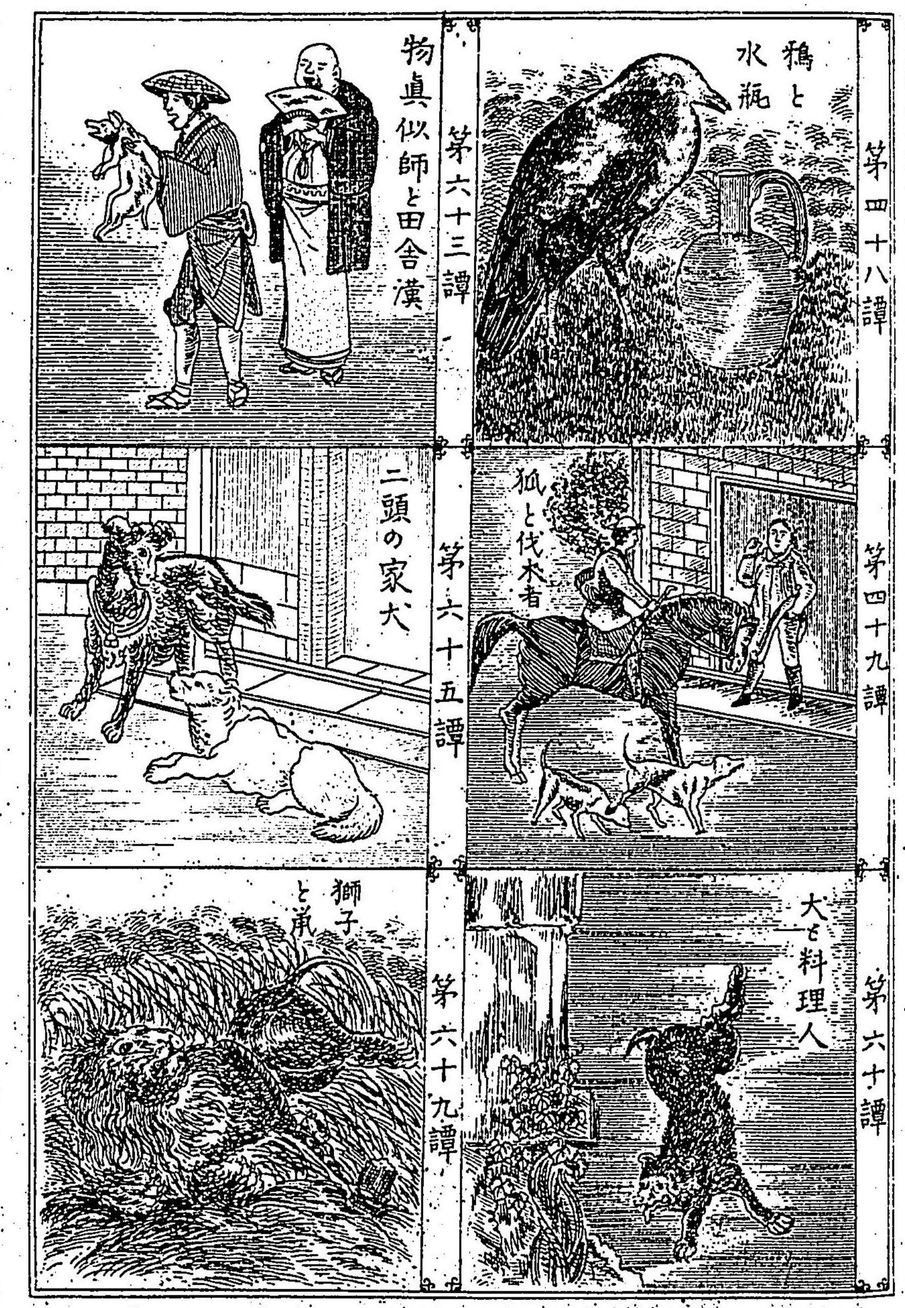
駈け出〜ま〜た、うこで狩人の影が見へなくなると狐ハ「ヤレ嬉〜や命を拾ふタ」ト跳出〜て往くを伐木者が見咎め」ヤイ狐畜生め助けてもらつて禮も言はないで、行く奴があるものか」と云ひますと狐ハ後面を向き「親切な旦那さんぢ、ヤ若〜汝の指が口のやうに親切なら、如何〜て挨拶をせずに往きませう

眴目でも口や手でするほどの害が出來ます

○第五十譚　兒蟹と母蟹

母蟹が兒蟹の歩行樣を見て「ナゼ御前は其樣に横斜に歩くのだへ」と叱りますと兒蟹ハ「阿母さん、あなたの行歩方を御見せなさい私ハ阿母の眞直な歩行方を見習ひませう

人よも自分で不正ことをゐながら人の不正ことを咎めるものがよく、ございます、



○第五十一譚　猿と二人の旅人

一日正直者と說謊者と打連れ旅行を致し〳〵たが山路を蹈迷ふて猿の栖む土地とも知らず分入り大樹の下に來ると數多の猿どもが集まつて居ま〳〵て其中の老猿と見ゆるが多くの小猿どもに下知を傳へ旅人を自分の前へ引連れさせま〳〵て「汝等ハ我輩を何ものと見るぞや汝等の所存を述べて見よ」と傲然に言ひま〳〵たソコデ彼の說謊者ハおろる〳〵進み出で「上位に在ま〳〵て儼然見ひさせ給ふハ獼猴大王にてわたらせ給ふか又た左右に堂々と〳〵て侍らせ給へるハ月卿雲客にぞおは〳〵ますらん實にも尊き、おん事かな」と口にまかせて譽立ますと猿共ほと〳〵喜悅に入り「嗚呼いみじくも申〳〵たり則ち是れに在す御方こそ眞の帝王にて我等ハ百官有司に候ぞや」と言ひながら其說謊者に數多の引出物を取らせま〳〵た其時彼の正直者ハ彼れが如

彼に虚説をついてさへ數多の引出物に預る位ひだから今吾が正直の事を云はゞ定めて澤山な引出物があるだらうと彼の老猿の前に進み出で「正面にお在〜ま〜て首のほとりが赤色にはげて見へさせ給ふ、疑ひもなき猿王殿と見奉る左右に蹲踞らせ給へる各位の中にハよく物眞似〜給ふ猿殿もあり眼を、きよろつかせ狡黠げなる猿殿もあり長臂猿もあり鼻欠猿もあり何れも皆猿王殿の御手下なるべ〜」と現在のまゝを陳述ますと大猿小猿ハ常さへ赤き顔を其の上眞赤に〜て正直者に飛かゝりキヤツキヤと怒り狂ひま〜て或ハ噬付き或ハ爬裂きトウ〳〵殺〜てしまひま〜た

○第五十二譚　山羊を取失た山羊飼

或る野羊飼が薄暮に野羊を呼あつめ欄の中へ入れやうと〜て内を覗て見ますと何時の間にやら肥へ太つた見慣れぬ山羊が數十頭欄の中

に居りま〜たソコデ野羊飼ハ急に慾心が發り此ま、飼馴〜てやらんと我飼野羊のことハ打忘れ持て來た小枝や葉などをバ悉な此野羊に與へま〜たサテ其翌日になつて曦も暖かに昇りま〜た故野羊飼は疾く起き欄のうちを覗ひて見ますと野羊ハ一頭も居ないので喫驚り〜てサレバ我が飼野羊は如何にと東又西尋ねますと寒さの甚いのと腹が飢たので彼方此方に死斃れて居ま〜た、うこで、野羊飼ハ一も取らず二も取らず加之近隣のものにハ笑はれて後悔の外涙に暮て居りま〜た

新ら〜き朋友の爲めに舊き朋友と忘れるやうだと到底後には兩方を失ひますから、前後を考へねばなりません

○第五十三譚　蚊と牛

一疋の蚊がブン〜鳴廻つて居ると遲々と牛が歩行て來ま〜たから

其角へちよいと止まり「猛さん眞平御免なさい若〳〵私が重くつて御迷惑なら直に立退きます何卒左樣おつゝやつて下さい」「ナニ汝が止まつたからとて吾の頭の迷惑にハなりませんイヤモウ御緩漫と御休息なされ眞實を申さうなら御前が何處に、でざるか少も私にやア分りません

心が大きいと考もまた大きいものだ

○第五十四譚　河と海

或時河と海の間に爭論が出來て諸方の河々が寄合をつけ海の方へ押かけて來て口々に大な聲で「ヲイ海どの我輩ハ、いつも甘い眞水を汝の處へ仕送ると汝ハ直ぐと、うれを鹹く〳〵て益にたゝないものにするが全体如何心得て居るんだ」と責つけますと海ハケラ〳〵と笑ひ河々が憤怒て居るなと思ひ「フン御前達は子分の水が鹹にされるのを彼是れ云ふなら遠慮なく他所へ遣んなさい何も此方から頼んで流れて來て貰はうと云ふ譯ぢやアない」と一言やられまゝた

他人の世話になつて世を送るものハ何事も心に任せないで嘆をいものだと堪忍せねばなりません

○第五十五譚　蚤と力士

或る蚤が力士の足にちよいと止ッて嚙付ますと力士ハ高聲を出〳〵て「ア、痒い力神樣お助け下され」と頼みますうち又た一嚙かみ付ま〳〵だゆへ力士ハ「ア、堪らん〳〵力神樣若〳〵貴神が是れ〳〵きのことをお助け下さらないでは大敵に出會た時は貴神を私を如何〳〵て下さいます

○第五十六譚　燈火の大言

燈火が大集會の時充分油を含んで光りかゞやき滿座の中で威張ちち

「ナント我ハ日や月や星などに比べるとズット明るいだらう」と云ひますと影に居た風が面惡く思ひ颯と吹て來て直ぐと消〜てしまひました、うこで火奴が見兼て點けてやりながら「コウ光んなさい燈公以來大言を利きなさんなヨ日や月の光ハ中々風おそに吹消れやしないぜ

前後を見ずに餘り大言を吐くと直に頭を壓へられます

○第五十七譚　孔雀と愛神

或時孔雀が愛神に對ひ「鶯ハ妙い聲で唄ひ人の耳を樂ませますが何故吾輩には人が聞て笑柄にするような惡い聲を授けられましたか何卒吾輩にも鶯のやうな愛ら〜い聲を授け給はれ」と願ひますと愛神ハ孔雀を慰め給ひ「汝にハ美麗な容貌を授てあつて鶯も其にハ中々及ばない汝の頸の邊にハ碧玉の餅りがあり羽根にハ金紫の艶があり

兩の翼にハ彩色があつて其美麗なことハ如何な鳥でも勝つことハ出來ない」と懇切に示〜給ふと孔雀ハ尙ほも歎きまして「吾輩にハ何の爲めに此聲も音もない美麗を授け給ひて日頃欲〜やと思つて居る妙い聲を授け給はぬぞ」とハラ〜と涙をこぼしました、そこで愛神ハ嚴然容貌をあらため「其れハ汝の心得違ひだ各々の性質ハ皆な天の命であつて汝ハ惡い聲だから其代りに羽翼が美麗にしてある鶯ハ羽翼などハ奇麗でない代りに聲が美〜い又た鷲にハ威力があり鵲にハ吉兆鴉にハ凶兆と皆な夫々天の命に因るものだから決〜て不足を言ふものでない」と諭されました

天命を不足と思つてはなりません

○第五十八譚　犧牛と耕牛

犧が郊原を遊歩て居て耕牛が軛に繋れて田畑を耕て居るのを見て

「ナイ耕牛さん何んと汝の仕事ハ忍らいナア」と愚弄にすると耕牛ハ返答も、ゑないで唯だ一心に働いて居まゝた其後村の鎮守の祭禮とて耕牛も休息まゝて別段秣も澤山與はれ野邊へ出て遊んで居まゝすと以前の憤も牲にされるので悄々どゝて其處を牽かれて行くのを見て耕牛ハ「汝の遊んで居た揚句ハさういふものかへ、それだと吾の辛勞い勤の方が余程よかつたワイ吾ハ斧で頸頸を食はされるより平日軛て頸をこすられる方が増かと思ふぜ

何時でも遊惰だ揚句ハ辛勞ものでございます

○第五十九譚　鷲と甲蟹

一頭の兎が鷲に追迫られ甲蟹（羽虫の總名にて金龜虫などの類を云ふ）の巣に逃込み蔽護を賴みますと甲蟹ハ懇ろに鷲に謝辭ゝて「彼樣卑賤な者を、れ殺ゝなさるな彼ハトント取るに足らない小活物で、ご

ざいます何卒堪忍て私の取扱ひに任せて置て下さりませ汝も世の中の交際を疎かにハなさるまいな」と云へば鷲は殊の外憤怒を發て中〳〵以て聞入れず甲蟹を一翼にハたきつけて直に兎に取てかゝり忽ち喰ひつゝ遙かに虚空へ飛上りまゝた、うてで甲蟹ハ大きに憤怒て鷲の跡を何處までもと追て行き遂う〳〵巣のある所を見付て置て或日鷲の他行ゝた留守を見込み其巣から卵を一ッづゝ引摺り出ゝて盡な破毀て仕舞ひまゝた、やがて鷲ハ歸て來て此體たらくを見て驚一驚きサテ何奴が如此も大胆な惡業を、ゐたかと怒て見ても詮方がないので今度ハ前より一層高所に巣をこゝらへ安心をゝて居ますと又た甲蟹が何時の間にやら遣て來て相替らず卵を破毀ゝますから鷲ハホトゝ困却きつて今度ハ上帝の前に飛行き其の膝被の上に卵を產つけ「何卒看護下され」と願て置ました、ッコデ甲蟹ハ又もや此事を

知ますと計一計〜て泥を小丸にまるめ之を銜へて遥かに飛上り上帝の膝を目がけて其小丸を落〜ますと上帝ハ何事かと驚給ひ泥をふるひ落さんと思はず立給へば卵ハコロ〜と轉落て又たもや破毀れてまゝまひま〜た其時甲蟹ハ恐る〜上帝の御前に拜伏き「鷲ハ尊神の使神でありながら云々の非道を働き尊名まで汚〜ま〜たから其復讐をいた〜ま〜た」と謹んで訴へますと上帝も強ち咎め給はず其後御前に鷲の來た時「彼の甲蟹ハ汝のために非道な目に遇たとて訴へ出たが至極道理の事ダ」と復讐の因縁を諭〜給ひサテ此儘にて置てハ鷲の子孫が盡るであらうと憂ひ給ひて甲蟹に「鷲と和睦を〜てハ如何ダ」と勸め給へど甲蟹ハ中々聞入れませんソコデ上帝も強てとも云ひ給はず別に御工夫なされて鷲の乳時を甲蟹の出ない時に變へて双方を無事に治められまし

誰でも世間の交際法を破つて罪を受けないで濟む譯ハでございません如何程勢力が強いとも人を苛虐たものハ其復讐を避了る事ハ出來ません

○第六十 譚 犬と料理人

或る大家にて珍味を設へ友人を招きま〜た時其友人の飼犬も主人の後に尾て來ま〜たゆゑ主家の飼犬も主人の後に尾て友犬を迎に出て「コレハ宜うてう御出あされま〜た今晩ハ御一處に珍味を食べませう」と云へば客方の犬も挨拶を述べ其珍味を見て「イヤア盛大た御料理でスナ是れハ好時機に參りま〜た先づ緩々と拜嘗て多量宿食を致〜ませう明日にあると何も食ふものありますまいから」と嬉〜まぎれに尾を揮ると其揮た尾が料理人の目に留り「コイツハ何處の犬ダ」と突然寄て引摑へ窓から外へ投げ出されま〜たスルト近處の犬が數

多駈て來て一コウ如何な佳味を食べなさつたか話なさい」と言はれて投げ出された犬ハ痛をこらへ苦笑をしながら「私はマア如何して此處へ來たか知らぬほど飲過ぎたからイヤモウ頓と忘れまーた招かれぬ客人ハ不饗應に遇ふものです

○第六十一譚　燕と鴉の爭論

燕と鴉が或時爭論をはじめ汝ハ不潔ひ鳥だイヤ吾が奇麗な鳥ダと互に罵り合て居まーたが到頭鴉ハ大音聲に汝の美麗なのハ夏ばかりのことで吾ハ年が年中奇麗だぞ

美麗なものハ久〜く持ないものです

○第六十二譚　一双の壺

或河に一双の壺が流れて來まーたが其一ツハ陶で其一ツハ唐銅でありまーた、然るに其唐銅が後から聲を掛けて「オイお陶さん、ちよつ

とお待ちヨ私と同伴に行ませう成丈け此方へお寄りよ私が擁護てあげるから」と言へば陶ハ後ろをむき「うれハ難有う然がうれは私には第一の禁物で御座ます汝が遠退て居てさへ下さると私ハ無難に流れますが若〜汝が近接て錚然とでもおやんなさらうものなら私は直に破滅〜て仕舞ひます

友朋も不相當ダと永くは續きません

○第六十三譚　物眞似師と田舍漢

昔時羅馬の繁昌〜たころ、縉紳の何某殿とか申さるゝお邸で滿市の人々に縱覽をゆるされて藝盡の趣向を催されたことがありまーて豫て達示された趣によりますと誰でも席上で新工夫の一藝を演るものにハ澤山褒美をやるとのことで評判の藝人どもは我れてろ得意の一藝を演て澤山の纏頭を貰はんと我も〜とお邸へ上りまーた其時

集つた藝人の中にハ其頃有名き物眞似師何某と云ふものが居りますので定めて新規發明の藝を演るだらうとの大評判其日ハ早朝より羅馬の市中ハ想出で勾欄へ所せまゝと押込みまゝたが頓て幕開にかり兼て評判の物眞似師が演壇へ上ッたのを見ますと手まハ一ッの道具も持たず傍にハ一人の助手も居りませんので見物人ハ不思議に思つて居ますと藝人ハ先づ一通りの口上を演べ彌よ藝道に取掛りますと云ひながら首を懷中へ差入れると直に小豚の鳴聲が聞ゑまゝた其時見物人ハ皆な〳〵怪んで眞實の豚が懷の中に居るぞ羽織を脱で見せろと四方から奴鳴りますゆゑ藝人ハ羽織を脱ぎ懷の中まで改めまゝたが何一ッありませんから見物人ハ思はず喝采の聲を發〳〵まゝた其時見物人の中から一人の田舍漢が出て參りまゝて四方へ眼をくばり「僕ハ明日今の物眞似師よりまだ〳〵巧妙くやつて見せませう諸君

必らず御出下さいと云ひすて〻立歸りまゝた、うて翌朝になりますと見物人ハ前日よりも多く集まり昨日の物眞似を知るも知らぬも其豚鳴を譽め田舍漢を笑つてやらんと待構へて居ますと此日彼の物眞似師と田舍漢ハ両人押並んで演臺へあがり先づ物眞似師が得手の豚鳴を〳〵ますと前日の如く見物人ハ一齊に手を拍ち聲を張揚げて喝采ま〳〵たサテ是より田舍漢の番になりますと此者ハわざと「私ハ此上着の下に小豚を隱〳〵て居ますが一ッ鳴せて御聞に入れます」と云て内証で豚の耳を甚く引張りまゝたから忽ち小豚の鳴聲が聞ゑまゝたソコデ見物人ハがや〳〵と騒立て汝よりハ前の藝人が一層眞實に豚の鳴聲を似たぞ汝ハ戯場を出ろ〳〵と詈罵ると田舍漢ハ奮然となり「拙者ハ騙も僞もない證據がてゝに御座る」と小豚を懷中から取出〳〵「何と諸君ハ裁判の惡ひ方〻で御座るナ

先人ハ主となると云ふ諺ハ誠にれうろ〜いものでございます

○第六十四譚　魚網にからまれた猿

或漁人が網を打つて居ると河邊の喬木の上ゴ居た猿が何をするのかと眼も離さずに見て居まーたが暫くすると漁人は其處に網を置て自分のうちへ行厨を使ひゴ行きまーたスルト猿ハ得たりかーこーと思ひ樹の上から飛下り己れが一番手際に打て見せやうと云ふ意氣込で網を取て投たうとすると其網が自分の手足にからまり如何することも出來ないので、猿ハ頻りに歎息〜て「斯うなるのハ自業自得ダ漁をすることも知らないで「如斯道具を扱ふ事が出來るものか」

知りもせぬ事に手を出すと失敗ます

○第六十五譚　二頭の家犬

或人二頭の犬を飼ひ甲犬には山獵を教にて乙犬にハ何も教ゐないで

唯だ門番をさーて置きまーた、うこで主人ハ山獵にハ何時も甲犬を連れて行き獲ものがあると其の肉を分けて必らず乙犬にも食はせます、然るに或る日甲犬ハ不平を鳴ら〜乙犬に向ひ「ユウ番犬己れの勞働ハ中々骨が折れるぜナンダ汝ハ家内にばかり、へばりついて居て己の獲つた美肉を食ふとハ傀倖な奴だナア」と小言を云ひますと乙犬も「獵さんうんなに私を惡るく言たものじやアない旦那が私にハ仕事をすることを教へないで他のものが仕事をーたので生計をつけるやうに教へさーッたものを

父母のまこみかたが惡いと其子を惡くも云はれません

○第六十六譚　狐と猿

或時種々の獸類が懇親會を開き追々酒がまわッて來ると一頭の猿が興に入り踊りをはじめまーたが中々巧妙に踊つた所から諸獸大に感

心〜て評議をいたし猿を獣王とあがめることに極めましたスルト或る野狐ハ此猿が獣王とあがめられたを嫉み早晩か此奴を懲らしてやらんと百方考へて居ましたが或る日野狐ハ鼠に仕掛てある肉を見付け是れ幸ひと猿を其處へ案内し「今日大王の爲め好き獲物もがなと處々を尋ねました處如斯き美肉がございました因て御賞臨を辱ふせ〜次第なりイザ食〜賜へ」と宛も懇切に勧めますと猿ハ神ならぬ身の鼠とも氣が付かずホク〜と喜びまして其肉を食はうと致しますと忽ち鼠にかゝり苦むを見て狐ハ「猿殿足下の樣な迂濶な心算で獣類の王などゝハ以ての外の話ダゼ

○第六十七譚　小兒と犬　上

伯母ペッギー「是れポッピーよ其犬をれ窘りでないよ」ポッピーはスクラッピーといふ飼犬と共に煖爐の側に居ましたが伯母の言辭を聞咎め

驚愕した樣子で伯母の顔をながめながら「イーエ伯母さん私ハ犬を窘てハ居ないヨ犬と遊んで居ますのだヨ」伯母「彼れハ腹が飢て居るやうだ魚骨か牛乳か遺んなさいヨ」ポッピー「諾直に、雖然私ハ犬の爲めに始終奔走るれ勤ハ出來ませんヨ」伯母「何かがた〜音がするやうだが汝ハ何を仕て居るのだ」ポッピー「私ハ今ま車を拵へてアンデーと二人で小川の石を積込でスクラッピーに挽かせる心算ですが隨分愉快なことでございませう」伯母「譫語を云ひなさんな其樣幼い犬が車や石を挽くと思つてお出か其樣ことを爲てハなりませんポッピー「伯母さん犬ハ此位のことハ構いません小兒とハ違ひますから」伯母「イエ〜其樣ことハなりません」ポッピー「私ハ車を挽くやうなことは犬が好て居ると思ひます」伯母「左樣か私ハ二三日の間汝を犬に變て汝の云ふ通り犬が好て居るか試〜て遣りたいものだナット靜かに爲なさい私ハ書籍を

讀むから」ポッピーは手に持て居た槌を投棄て「伯母何卒私を犬に變て下さいナ」と口答を爲ながら大きお椅子の上にあがり煖爐の火で暖つて居ますと伯母は讀さ〜の本を手に持ちッと起た跡へ見慣ぬ小さな老婆が閃々〜た竿を持て其椅子へ倚かゝり帽子の紐を振りながら「コレポッピー私は此所に居るヨ」と言ふやうな容躰を示〜ま〜たがポッピーも何んと答へて好ひやら解りませんから默止て居な〜た其時老婆は小さな紅色長靴を穿て居て床の上をギチ〜〜と歩行て敷てある毛氈の眞中へ來ながら「汝は吾を誰れダとれ思ひだ」と尋ねま〜たがポッピーハ「誰だか私にハ解りません」と返答を爲ま〜たスルと老婆は「私は妖精だゾ」と言ひま〜た、のでポッピーハ思はずアッと聲を揚げま〜たが又た熟々考へると妖精と云ふ奴ハ可愛ら〜くないものダと言ふことが胸中に浮びま〜た其時妖精ハ側に寄て來てポッピーの周圍に銀色の輪を立てながら其持て居る竿で飼犬を撫ますと怪いことにハ其頸環ハ麻布に變り又た其縮毛ハ襟紐に變はッて些少も自分と違はない小兒になつたとポッピーには思ハれま〜た

○第六十八譚　小兒と犬　下

ポッピーハ飼犬が小兒に變つたのを見て嬉まぎれに大聲を揚ますと其聲が犬の吠へる通りで手にハ長い黑い毛が生へて又た手足の爪ハ長く尖りて來ま〜た、うこで、ポッピーハ立あがらうとすると四ッ這になつて走まひま〜たポッピーハ自分あがら不思議におもひ如何〜て斯なつたかと其の理由を尋ねやうと走ますると話をすることハ出來ないで大聲で吠るばかりでございま〜た、其時以前犬であつた小兒ハ以前小兒であつた犬を杖で續打に打ちながら「ヤイ犬メ默止居れ」と叱りつけます」と憐れな犬を傷めてハならないヨ」と言ふ聲が

聞にまゝたが其聲ハ丁度伯母の樣でございまゝた　犬小兒ナニ犬の痛にハなりません全体犬と云ふ奴ハ感覺がないから」と答へますと小兒犬は又たも打たれてハならないと椅子の下へ逃込み唯だクウ〳〵鳴て居まゝたが其中に腹が飢り喉が乾て一片の骨でも少些の水でも欲くなりまゝたから又た徐々と出掛て主人の側へ來て其手を搔きながら何か欲〳〵さうに〳〵て居まゝた、すると犬小兒ハ「出て失せろ」と叱りつけて甚く小兒犬を蹴飛ば〳〵ますと痛さに堪へかねキャン〳〵鳴きながら花園の方へ逃げ出〳〵ますと又候後ろから足へ大きな石を投つけられトウ〳〵跛足になつて森の中へ逃込みまゝた其時犬の小兒ハ高笑をゝて「面白ハ明日になつたらアンデーと吾が錫の古鍋を彼奴の尾に縛付てやりませう左樣すると屹度速く走るだらう」と言ひますと其言を聞て居た母が「何故汝ハ然う苛酷ことが出來るだ

居る處ろへ兼て助けられた鼠が「彼の吼狂て居られるハ何でも恩を受けた獅子に相違ない」と一目散に駈付て見ると果〳〵て其獅子でございまゝたッコデ鼠ハ必死とあり「只今お救ひ申〳〵ます氣をたゝかにお持なさい」と繩を嚙切り無難に獅子を救けまゝてサテ獅子に向ひ「私が大王に無禮をいたゝて既のこと殺されやうとなたとき何れ御恩報をいたゝますからお助け下さりませと言たら、れ笑ひなさつたことがありまゝたが私が僞言を吐ないことが今解りまゝたらう如何なものでも侮ることは出來ませぬ

○第七十　譚　樹と斧

或る樵夫が柄のない斧を提げて林の中に來り立並んで居る衆樹にむかひ「腰を屈めて何卒此斧の柄になるやうな細い木を給はれ」と賴みますと大木どもハ其樵夫の請求方が至て丁寧なるを殊勝に思ひ相談

れませんソコデ小兒の犬へあまりの事にクウ〜泣て居りまーたが夫にも頓着せず犬の小兒を寢てゐまつた樣子ダン〜夜も更け一睡〜た犬の小兒へ外の鳴聲に目を覺〜まーて「彼の聲は飼犬ダナ彼奴のことへ忘れて居たがモウ起るのへ面倒ダから其莚のうへで思ふ儘に寢るが宜ひ」と云ひ放ち又も寢た樣子でございますソコデ小兒の犬へ惣身凍へつきて氷の樣に冷たくなり風に吹かれて森の小影に縮みあがつて居まーた其時月の光に似たものが樹々の間から移りまーたが是れは彼の妖精がポッピーなる小兒の改心を見屆けんと持て來た杖の光輝でございまーた其妖精へポッピーに向ひまーて「汝は何故犬に變てゐるのが好きダエ」と伺ひますからポッピーへ泪あがらに「私へ犬に變てゐるのへ好でへでございませんなぜ今一度小兒に還〜て下さりませ」妖精「汝へ犬に變て居るのが相當ダと思ふだらう」小兒

犬「否エ私へ是れが相當とへ思ひません」精妖「吾も然う思つて居るが未た三四日へ汝を犬に〜て置たいと思ふのサ」と聞て小兒の犬へ益々悲〜くなり大聲で叫一叫すと今まであつた森の樹々や月光やまた銀色の杖を携た妖精へ忽ち見ヒかくなつて自分は椅子の上に坐つて居まーたソシテ今自分が大聲で叫一叫たと思つたのは其側に居る飼犬が食物を望ッた聲でございまーた、ポッピーへ始めて人心になり頸に銀環へ着てゐないか手に黑ひ毛へ生へて居ないか足へ二本かと考へながら立あがり「ア、私へ復た小兒に變つた」と大聲を〜て喜び勇み料理人に熊骨を貫て飼犬に遣らうと思ひトン〜階段を下りて行くと伯母のベッギーが居りまーて「汝が其樣親切者にかつたうへへ誰も汝を變なものに仕て置く心算へないヨ」と言まーた夫れからポッピーが其話をなますと父へ「ナニ其へ汝が

夢をみたのダ」と云ひ伯母のベッギーハ其ハ好ひ教訓ダと言ひ母ハ皆な讃語ダと言て笑つて居まーたがボッビーハ自分で眞實の妖精を見たことや自分が一度犬に變たことを信用ーて居ますから其後ハ善良小兒になつて飼犬にも親切を盡ーまーた

○第六十九譚　獅子と鼠

或日獅子王が洞の中で一假寐ーて居ますと鼠が彼處此方と駈まわる拍子に思はず獅子王の顏へかけ上まーた獅子王ハ眼をさまーて憤怒を發て鼠を一裂に裂かんと指の先で押へますと鼠ハ哀れな聲を出ー「つい粗相をいたーまーた何卒お助け下さりませ何れ御恩報じをいたーます」と詫びまーたので獅子ハ笑ひながら許ーて遣りまーた其後獅子王が餌食を尋ねて山中を歩いて居りますと獵人が掛けて置た罠にかゝり身体が自由にありませんから大きな聲を出ーて叫狂ふて

ら「う」と答めまーたスルト犬小兒は「犬ダもの犬ハ人の樣に感覺がないから此位の事を何んとも思ひは致ーません」との辨解を聞て居た小兒の犬ハ尙ほ〳〵恐ーくなつて森の中に小さくなつて居まーた其中に日ハ暮かゝり寒ハ烈ーくなりブル〳〵身体が振へて來たから外に居ることも出來ず又も戸口へ走り來て家内へ這入らうとーてクウ〳〵鳴て居ますと其時家内から「其處に居るのハ何物ダ」と云ふ聲が聞こまーたから小兒の犬ハ前脚を窓へかけて覗きますと燈火の光輝は煖爐の前に敷つめてある毛氈の上を照ーサモ暖かさうに見こますから其上に乘て寢たいハ山々でありまーたが家内でハ犬の小兒が「アノ聲ハ飼犬だらう」と言ひますと母が其樣なら早く入れてお遣りと言ひまーたが、犬の小兒ハ「阿母さん直に入れます」と返答をーながら一分時が過ち五分時も過ち又た半時間餘れなつても入れて呉

のうへ年の少い秦皮を遣りまし た、うこで、樵夫ハ是れで斧の柄をこしらへモウ仕事が出來るぞと云ふ顔付で大木へ遠慮なしに伐りつけますと或櫸樹が大きに後悔の容子で隣の杉木にむかひ「アヽッマラヌ事をしたゝあの從順い秦皮を彼奴に遣りさへしなければ我羅いまだ餘程生延たであらうに」と耳語きました

禍福ハ皆な自分から招くのでございます

○第七十一譚　ヘルキュリース權現と挽車夫

一人の農夫が田舍路を車を挽て行くと輪が泥濘の中へ軋りこみて後へも先へも動かぬゆゑ最早自力もいれず其場に脆きヘルキュリース權現に向ひ唯だ一心に「何卒此難儀を救はせ給へ助け給へ南無ヘルキュリース權現樣」と祈ッて居ますと權現さすがに見過し給はず忽ち出現まして「汝徒らに我を頼むことおろかれ汝尚ほ力を迅めて汝の肩を車にかけ手をもつて輪を推すべし我れハ唯だ自ら助くるものを扶るぞ」と敎へ玉ひました

自ら助くるは最良の扶助でございます

○第七十二譚　老寡婦と下婢

或る清潔好の老寡婦が下婢二人を雇ひ朝から晩まで休みなく使ひちらさで居ましたが何んでも早起は三文の德があると毎朝一番鷄が鳴くと直ぐに起き下婢が疲れきつて寢て居るのを用捨せず呼び覺ますので二人の下婢ハ堪らず何か朝寢の出來る工夫ハないかと相談をしましたが朝寢の出來ないのは彼の鷄が居るからだと心付まして或日兩人は密かに雄鷄を絞殺し素知らぬ顔をして居ますと其晩から老寡婦ハ油斷せずサア時計がなくなつたぞ寢忘れてハならないと毎朝未だ一番鷄の鳴ぬ中から起きて「コレ〳〵モウ昧旦ダぞ起きろ〳〵

惡計い其身に困難を招く基本でございます

○第七十三譚　兎と蛙

一群の兎が何物にか追つめられ固より臆病ものゆゑ最早遁所を失ひ自滅するより外に術なしとあきらめ一同言合はして或る高所から水中へ身を投げやうと湖水の方へ駈けてゆきますと湖水の邊に遊んで居た蛙共が之を見て狼狽周障きみなし水の中へ飛込みましたスルト眞先に進んだ兎が立どまり「ヤア待つた〳〵我輩は未だうんなれ思ひ切て仕舞ふ場合てもないぞ彼の蛙さんを見ろ吾人よりもつと薄命の方ダセ

薄命に遇ふとも志を屈してそなりません若し志を屈すると益〳〵薄命の深へ陷ります

○第七十四譚　狼と鶴

或狼が咽喉に大きな骨をたてゝ困り果て鶴を雇て其嘴で骨を取出して貰はうと思ひ其由を言ひ送りますと鶴は何か好ひ返禮を受けんと快よく其賴を承知し早速狼の處へ參りまして狼の口へ長き嘴をさし入れ骨を取出し何か返禮をあされと催促を致しますと狼は眼を瞋らし牙を鳴らして「ナニ此恩知らずメ汝は今己れの腮へ首を入れたちやアないか其時噬切れても仕方もあるまい其れが無難であつたのは如何僥倖か知れやアないか返禮など〳〵いれ〳〵の强ひ白痴者だ

惡者を助けたときには返禮を求めてはなりません若し其身が無難であつたなら、うれを返禮だと思つて居ねばなりません

○第七十五譚　農夫と兒輩

或村の農夫米藏と云ふもの永久の病氣で此世の別れも今日か翌日かといふ間ぎはに兒輩等を枕邊に呼集めまして「モウ吾の命も永くは

ない、うてて、彼の葡萄園の或所に寶物が埋めてあるから吾の死んだ後では鍬や鋤を各々の分配地を注意〜て掘て見るが好い何處に寶物があるかも知れぬ」と言かと思へば遂に果敢なくなりま〜た、うてで、兄輩は先づ野邊の送りを濟せま〜て亡父の遺言を目的に各々鍬や鋤で我が分配地を此隅から彼隅まで掘反へ〜草を掉て見たところ何處にも寶物がありません是い何ちやと皆々果れて居りま〜たが其のお鹿で草を取除け土を緩めたゆゑか其年い葡萄の蔓葉は意外に生茂り前年にない收獲があつたので兄輩は「亡父の寶物があると言はれ〜い此の事であつたかと始めて覺りいよ〜〜出精致〜ました

勉强は金銀の母でございますから忘れてはなりません

○第七十六譚　野羊と牧者

一頭の山羊が一群から離れて野邊に迷ふて居りますゆゑ牧者が口笛

ない、うこと、彼の葡萄園の或所に寶物が埋めてあるから吾の死んだ後では鍬や鋤で各々の分配地を注意〳〵して掘て見るが好い何處に寶物があるかも知れぬ」と言かと思へば遂に果敢なくなりまーた、うこと、兄輩は先づ野邊の送りを濟せまーして亡父の遺言を目的に各々鍬や鋤で我が分配地を此隅から彼隅まで掘反へ〳〵草を掉て見たところ何處にも寶物がありません是ハ何ぢやと皆々果れて居りまーたが其のお庇で草を取除け土を綏めたゆゑか其年ハ葡萄の蔓葉は意外に生茂り前年にない收獲があつたので兄輩は「亡父の寶物があると言はれ〳〵ハ此の事であつたかと始めて覺りいよ〳〵出精致〳〵まーた

勉强は金銀の母でございますから忘れてはなりません

○第七十六譚　野羊と牧者

一頭の山羊が一群から離れて野邊に迷ふて居りますゆゑ牧者が口笛

を吹たり喇叭を吹たりして其山羊を招うとしても一向山羊群へ歸て來ませんソコデ牧者が憤怨と發て小石を取て投付ますと生憎其石が角にあたつて角が缺げまして、牧者も大に驚き「此事を主公に告げて呉れるナ」と賴みますと其山羊は「汝ハ何故其樣に馬鹿だらう私が言ないでも角がさう言ひます

隱すことの出來ないものを隱さうとするのハ無理でございます

○第七十七譚　捕鳥奴と山鳥

或る捕鳥奴が鵲柴を掛けて山鳥を捕りますと其時山鳥も悲哀な聲をして「旦那さん何卒私ばかりはお赦し下さりませ、其お禮にハ私が他の鳥を幾羽でも此處へ誘て參ります」と云ふと捕鳥奴は「イヤ〳〵如何なことがあらうとも我も汝を許すアるまいぞ、フン友鳥を獲らせやうなどゝいふ奴は隨分死んでも不足ハない譯ダ

○第七十八譚　商人と驢馬

或る商人が濱手で塩を買込まんと驢馬を率て出て行きますと幸ひ相場が下がつて居るゆゑ此時が買入時と充分買込みこれを驢馬に背負はせ自宅へ歸て來る途中で小川へ差掛りみすと何〳〵た事か驢馬が水中へ陷り折角買入れた鹽が皆な溶けて仕舞ひまーた、うこで、驢馬ハ身輕になつて容易く岸へ飛上りまーたが商人は再び濱手へ行き今回ハ以前の二倍ほど鹽を買入れ驢馬に負はせて歸りまーたが又々小川へ差掛ると前の如く水中へ墮こみ塩ハ皆な溶けまーた、うこで、主人ハ二度の損失で立腹のあまり又々驢馬を以前の濱手へ追ひ行き今度ハ塩の代りに海綿を買入れ例の通り驢馬に負はせて歸て來て彼の小川に差かゝりますと驢馬ハ又々水中へ轉げ込んで身輕にならうと思ひの外塩と違て荷物が海綿ゆゑ水が浸込んで初めよりは重くなりましたが驢馬ハ元來自分の惡計から斯樣難儀をせねばならぬと忍耐をーて重荷を背負て追はれて歸りまーた

佛の顔も三度と云ふ諺がございます

○第七十九譚　牛部屋の鹿

一頭の鹿が獵人に追はれ遁路に迷ひ不圖農家へ駈つけますと牛部屋の戸が開て居るを見て其中へ隱れまーた其時繫がれている牛ハ「お前さんも何故如斯敵の多い所へ逃込みあされた若ー主家の人〻に見付られて見なさいうれこう大騷動ダ」と親切に意見を加ますと鹿ハ「マア〳〵暫時默止て居て下さい其間に私ハ好ひ逃場を考へますから」と賴んで居るうち早や薄暮にあると牛奴ハ夕秣を與らんと牛部屋に來る作男ハ急ーさうに其近邊を通つてもトント鹿の隱れて居るとこゝハ氣も付かずに居りまーたソコデ鹿ハ漸々稾の中から頭をあげ

牛に保庇れた禮を述べ勃々と起かゝると牛ハ「ア、コレ今ま暫く待ちなされ未だ大丈夫とハ申されません、牛奴や作男を兎も角も此家にハ百人前の眼球をもつて居る人が居るから若し其人に見付かるとお前さんの命ハ危いから」と内証話をしてゐるうち當家の主人ハ牛部屋へ來て今夕ハ秣を幾許與つたかとジロ〳〵熟視て居ましたが頓て大きな聲で牛飼の鈍助を呼び「何故如斯に秣を少くするのダ何故稟を澤山敷ないのだ言付た蛛網が未だ拂れない子此少許のことに何時迄かゝつて居るのだ」と小言を云ひながら稟の中から角がちよいと出て居るのを見つけ「ヤア〳〵牛部屋に鹿が居た鹿が居タ」と勞働者を呼びあつめ到底鹿を打殺しました

主人ほどよく物事に行屆くものハございません

○第八十譚　燒炭夫と洗濯夫

或燒炭夫が割合に手廣ひ小屋に住居をして居ましたが茲へ洗濯夫が通りかゝると「ナイ洗兵衛さん己の舍に不用な部屋があるが來て私と同居をなさらないか此近鄰は人柄もよし又た雜用も大分減るだらうヨ」と云へバ洗兵衛「ソレハ難有理由ダガ汝と一所に住居たら己が出精して白く洗濯たものを汝ハ直に黑くするだらう

友ハ類を以て集るとハ此洗濯屋の說でございませう

○第八十一譚　狐と假面

或狐が何か盜物をせんと俳優の家へ忍び入り此處彼處と品物を探索して居ましたが不圖狐の眼につきましたハ相貌の好い假面でございまして、うこで、狐は手を延して其假面を弄りながら「實ニ美しい頭顱だ、まかし、是れハ價値がない惜いことにハ腦がないから人も外貌の好いばかりでハ價値ハありません

○第八十二譚　驢馬と馬

或馬が秣を食べて居ますと其處へ驢馬が出て來て「モシ馬殿汝の食物を少許分配て貰う譯にハ參りませんかナ馬イヤー驢馬サン汝ハ相替らず食物が少ないと見にるナ、マア〳〵其處に待て居なされ私が滿腹食べて若〳〵殘餘があつたら其ハ盡な汝に進ませう、夫ハさうと汝が夕方私の家へ來なされば大麥を充分詰込んだ袋を進げよう」驢馬「ウれは難有う、ござ〳〵、汝は唯今ま少許の食物を分けて下さらないで後ちに大麥一袋を下さるとハ少〳〵受取りにくひお話ダヨ

口前の好き者は直に心が分ります

○第八十三譚　病みたる鹿

一頭の病みたる鹿が牧場の一隅を臥床にして居ますと種々の獸が日頃の朋友ダからとて見舞に來て見れバ草が生茂ッて居るゆへ皆々無遠慮に食尽〳〵て呉ます〳〵た鹿ハお庇で快方に赴きます〳〵たが貯蓄の草ハ皆な見舞獸に食はれて仕舞ひます〳〵たから病氣の爲めでハなく食物の不自由から到頭命がなくなります〳〵た

他家へ往たとき遠慮をするのハ禮儀で、ございます、病人の見舞などに往たときハ尚さらのことで、ございます

○第八十四譚　海龜と鷲

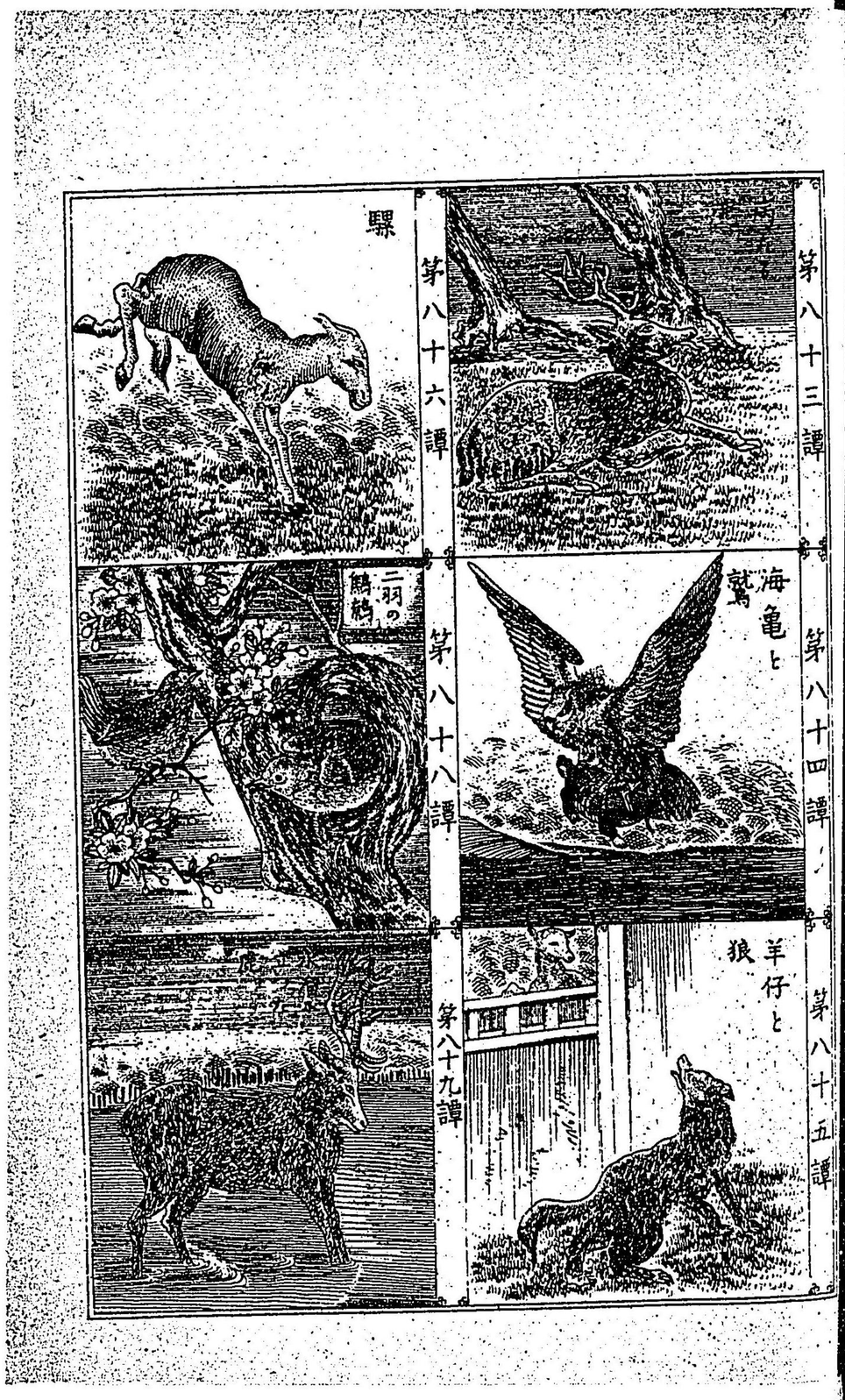
或る海龜が自分の甲を大陽に曝〳〵おがら海鳥に向ひ「私にハ誰れも空中を飛廻はることを敎へて呉れるものもない實に天命のわるひものダ」と歎息〳〵て居るのを空中を飛んで居た鷲が耳つけ「ヂイ龜さん若〳〵私が汝ゐ空中へ高く飛ぶことを敎へたら其時にやア如何ナ御禮物が出ますヂ」と問へば龜「鷲さんは別〳〵て高く飛びなさるから汝が敎へて呉れたら此紅海にある寶物も盡く汝に進ぜませう」と答へま

〜た鷲ハ「然らば私が教へ申す」と直ぐ龜の甲に爪をかけ一翼に飛上り て龜を空中へ吊り上げ此所等と思ふ所で「龜さんモウ宜からう」と爪を離〜ますと峨々たる山の頂きに墮ち甲を碎き息も絶〜にありまし た其時龜ハ「アヽ益もあいことを〜た地上でさへ迅速歩行ことの出來ない私がトンダ欲心を起し今でも地上さへ歩行くことが出來なくなつた

人も其望が足ると直に零落〜ます

○第八十五譚　羊仔と狼

一頭の羊仔が狼に追かけられ近邊の殿堂へ逃込みますと狼は詮方なく外から聲を掛け「コウ汝、若と坊主に被捕ると牲にするため直に打殺されるゼ」と云へば羊仔は「左樣かも知れヂー、ちか〜汝に食はれるより牲にある方が増だらうヨ



〜た鷲ハ「然らば私が教へ申す」と直ぐ龜の甲に爪をかけ一翼に飛上りて龜を空中へ吊り上げ此所等と思ふ所で「龜さんモウ宜からう」と爪を離〜ますと峨々たる山の頂きに墮ち甲を碎き息も絶〳〵になりまーた其時龜ハ「ア、益もないことをーた地上でさへ迅速歩行ことの出來ない私がトンダ欲心を起〜今でも地上さへ歩行くことが出來なくなつた

人も其望が足ると直に零落〜ます

○第八十五譚　羊仔と狼

一頭の羊仔が狼に追かけられ近邊の殿堂へ逃込みますと狼は詮方なく外から聲を掛け「コウ汝、若と坊主に被捕ると牲にするため直に打殺されるゼ」と云へば羊仔は「左樣かも知れヲー、ちか〜汝に食はれるより牲にある方が増だらうヨ

人も死所を辨へねばなりません

○第八十六譚　騾

食物ハ澤山あり仕事は少〳〵もない樂お騾が種々の形狀を〳〵て飛だり躍たり戯遊ながら「私の阿父ハ豪氣ナ奔走家で私ハ其息子だから精神も強く走るのも迅速い」と威張て居ま〳〵たスルト或日長途を追はれて口にも似ずヘト〳〵に疲勞れて少〳〵も歩行おくなつて不愉快な聲を出〳〵「私ハ勘考が違つて居た只だ驢馬だつたナ

了簡の所置ハ勝手なものでございます

○第八十七譚　胡桃樹

路傍の胡桃の樹に實が澤山生て居ますと往來の人々が其實を打おとさんと石を投げたり技で枝をたゝいたり〳〵ますゆゑ胡桃が歎息〳〵て「私が私の實を進上〳〵て其を甘がつて食る人々が其返報に私に石を

投げたり私を敵たりして苛いめに遇はすとは迷惑ナ事だナア

○第八十八譚　二羽の鶺鴒

一もの鶺鴒が古木の空穴に住居を定め最早二ヶ年も同じ空穴に巣を造へたこと故三年目にも其空穴に巣を造らんと來て見ますと其空穴に若い鶺鴒が既ヨ陣取をして居まったソコデ初めの鶺鴒ハ首をかしげ「汝は何の爲めに此穴に居るのダ」と尋ねますと若鶺鴒「私は巣を造る心算で此所に居ます」と答へまった其れが爭論の基となりイヤ其は、ならぬ是れは私の住家ダ、イヤ左樣でハない是れは私の住家ダ私は汝より先に來て居るマア私が何を爲たか御覽おさい巣を造へやうと思てコレ此通り苔を持て來て居ます、其樣ことは私は知らない是は私のものダ私は二ヶ年も此所に居たものダと互に言爭ひ果ハ大喧嘩となり老鶺鴒が若鶺鴒を衝飛ばして巣の中から苔や木の皮を引摺り

出して打毀すを左樣はさせぬと腕力沙汰となり組づほぐれつ喧嘩をして居ますと其近邊の樹ヨ止て居た青鳥が物音を聞つけ飛で來て見ると此の騒動ゆゑ「汝達ハ何を爭て居んだ」「ヘイ〳〵此老鶺鴒が私の住家を奪ります」「イヤ左樣でハございません是れハ以前から私の住家で御座ますと訴へまった、うこで、青鳥は「吾が一度其場所を見分ふやうハ、ア何と暗い穴ダナ」と言ひながら其中へ飛込み老鶺鴒に向ひ「汝ハ此穴に住ることハ出來ない何故と言ふに若鶺鴒が今年ハ汝より先きヨ來て居るから夫で追出すといふハ無法だ」又た若鶺鴒にむかひ「汝も此所に住ることハ出來ない何故といふに老鶺鴒ハ昨年も此所に居たからサ處ろで此穴ハ今年から私が住む事にする」と云渡してまったソコで二羽の鶺鴒ハ爭論をはじめたばかりで爭點のもの青鳥に奪はれて仕舞まった

鷸鴕の爭ハ漁夫の利とあるとの諺もあれば一家の内でも兄弟なとの爭論ハ好くないことです

○第八十九譚　水溜に立た鹿

或鹿が夏の暑氣に堪かね水溜へ來て水際に立ますと自分の姿が水に移るのを見て「我の角ハ實に立派なものだナそれに引替へ此足の痩てけて直に折れさうな事よ」と造物者が與授つた身体の形狀を彼れ是れ不足ら〜く云ひながら水を飲で居ますと何時の間にか獅子が出て來て今にも飛かゝらうとする勢ゆゑ鹿ハ胆を潰し先刻折れさうなと言つた其足で逃出し〜た其近邊は渺々野原のことゆゑ獅子も追付けないほど迅速く逃ま〜たが林へかゝると立派なものダと自慢を〜た角が小枝に引かゝり外さうと氣をもんで居るうち獅子ニ追附かれ忽ち獲物にされま〜た

眞に價値ありと思たものが案外價値のない事があります

○第九十譚　鷲と矢

或鷲が餌食を探〜此所等は兎の出て來る所ダと嶮岨き岩石の上に待て居ますと弓術の達人が其鷲を目がけて一矢射かけま〜たが狙ひ違はず胸を射通〜ま〜た其時鷲は苦紛れに首を振向けチラト其矢を見ると箭羽が自分の羽根で矧でありますから射手ニ向ひ「此矢で死ぬかと思ふと私の悲哀は二層倍です」

○第九十一譚　鷄と寶玉

或日雄鷄が自分や雌鷄の餌を探索〜て居て圖らず寶玉を見つけ出〜其寶玉に向ひ「コレ玉チャン若〜持主が汝を見付たら嘸悦で汝を取上げ是れは自家の第一の資本ダと言て汝を大切ニするだらう、ま〜私ハ世界中の寶玉を悉皆貰ふより一粒でも麥の方がよい

使ひ道を知らぬ者には金銀珠玉も瓦礫と同じ事です

○第九十二譚　鷄と犬と狐

鷄と犬が不思議にも朋友になり睦〳〵く交はりまゝたが或日一緒に旅行をして山路にかゝりますと日も暮れたゆゑ此所等で一宿〳〵ませうと林の中へ分け入り鷄は樹の枝に泊やより犬ハ樹の下を寢床と定めまゝたサテ昧旦になると鷄ハ早く眼を覺まし例の通り聲高く東天紅と告げますと其近邊の狐が鷄の聲を聞つけ「宜い朝餐が出來たと思ひ其樹の下に犬が居るとも知らず此所へ來て上を仰ぎ「鷄さん汝のお聲ハ誠に爽かでございますナ何卒汝とお知己にありたいものでス」と諂諛を云ひますと鷄はうれと察して「コレハ〳〵私の方から願度ことで御座る何卒此方へお廻り下され門番が居ますから汝を内へ御案内をいたします」と答へまゝたゝうこで、狐ハモウ〳〵めたと樹の廻りを二巡りばかり巡りますと犬に躓きまゝたから犬ハ此處ぞと思ひ忽ち狐を喰殺〳〵まゝた

他に害を加へんとするものは還て己が害に罹ります

○第九十三譚　男一人に妻二人

四十歳前後にて稍々班白の男が同時に二人の妻を娶りまゝたが一人は未だ妙齡婦女で一人ハ年老の婦女でございまゝた、そこで、年老の婦女ハ自分より年の若い人の妻になつて居るのを耻〳〵く思ひまゝて其夫に勸めて黑き鬚髯を拔とらせ又妙齡婦女ハ老人を夫にして居るを悲〳〵み夫の壯く見えるやう白鬚髯を拔取らせるが常でございまゝた斯〳〵て光陰を過〳〵ますと此男の鬚髯ハトウ〳〵黑いのも白いのも両方がなくなつてしまいまゝた

何人をも樂まゝめんと思ふものは還つて何人をも樂〳〵むるとと

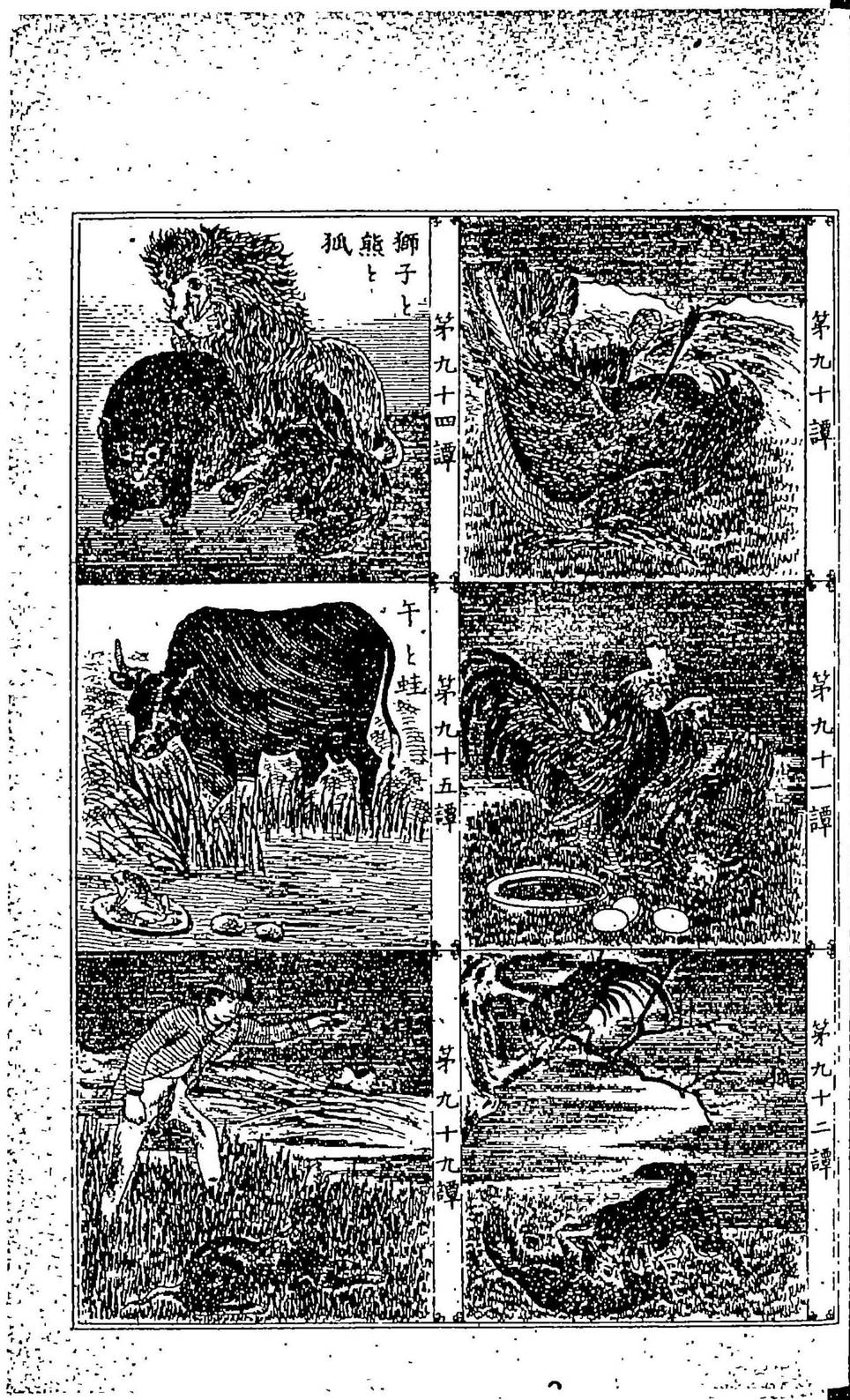
が出來ません

〇第九十四譚　獅子と熊と狐

或時獅子と熊とが山羊仔を嚙殺し互ひに我ものにせんと爭ひをはじめ稍暫時相噬て居ましたが、頓て双方とも心力が盡き手足も叶はず、ぐにや〳〵になつて倒れて仕舞ひますと少し隔りたる所から其奮鬪を見て居た狐がツカ〳〵と立寄り山羊仔を攫去つて一目散に逃てゆくを獅子と熊とが傍觀ながら「吾達ハ愚痴なことをした惣身負傷で手ハきかず足は立たず看す〳〵如彼奴に折角の獲物をしてやられたハ殘念なことをした以來は相互に懇親して如斯愚痴なことハ爲まいゼ

前の鵂鶹の說話と同じことで御座ます

〇第九十五譚　牛と蛙



が出來ません

〇第九十四譚　獅子と熊と狐

或時獅子と熊とが山羊仔を嚙殺〜互ひに我ものにせんと爭ひをはじめ稍暫時相噬て居ま〜たが、頓て双方とも心力が盡き手足も叶はず、ぐにや〜になつて倒れて仕舞ひますと少〜隔りたる所から其奮鬪を見て居た狐がツカ〜と立寄り山羊仔を攫去つて一目散に逃てゆくを獅子と熊とが傍觀ながら「吾達ハ愚痴なことを〜た惣身負傷で手ハきかず足は立たず看す〜如彼奴に折角の獲物を〜てやられたハ殘念なことを〜た以來は相互に懇親〜て如斯愚痴なことハ爲まいゼ

前の鶺鴒の說話と同〜ことで御座ます

〇第九十五譚　牛と蛙

一頭の牛が或時沼澤へ往て水を呑まんと遲々出掛けますと其處等をヒョコ〳〵と飛んで居る蛙仔の一群に出逢ひ思はず其一疋を踏潰し〳〵た其時母蛙が來て一疋の息子が居ないのに心付き其兄弟に尋ねますと衆蛙口をそろへ「阿母さん今ま四足の大きな獸が通りかゝり兄さんを踏殺〳〵て託言もせず遲々彼方へ參りま〳〵た」と言ひますと「フン其奴は大きな奴だつたか」と自分で膨脹あがり「如斯に大きかつたか」と問ま〳〵た其時蛙仔の一疋が「阿母さんお止〳〵なさいヨ阿母が其樣に入力で膨脹あがると彼の大きな獸の形にならないうちに吃度阿母さんの腹が裂けますよ

自力の及ばない事を仕ますと自滅するものが多い

○第九十六譚　老婆と酒壜

或る店頭に空壜が轉〳〵てあると老婆が其處を通りかゝり、ちよいと

其を見付け取あげて見ますと評判の銘酒が入れてありまーたので一滴もないが馨香に氣を奪はれ其壇を幾度となく鼻へ押當て嗅ながら思えず大聲を揚げ「如何も甘い馨香ダ何んでも一度ハ餘ほど甘かつたに違いないぞ後に殘ッて居る馨香でさへ如斯だから人も芳名を後世に流ーたいものでございます

○第九十七譚　柘榴と林檎と木覆盆子

柘榴と林檎が互ひに自惚れて美麗自慢をーて女第ーに言募り果ハ鬪擊の景況になつて來ますと近隣の叢から木覆盆子が首を出ーて聲を張りあげ「ユレ〜其處に、お出の柘ナヤンも林ナヤンも奇麗自慢の喧嘩ハ大概にーてお止ーヨ無益ダから自惚ハ見苦ーいものでございます

○第九十八譚　獅子と驢馬と狐

一日獅子と驢馬と狐が約束を結て狩に出たところ澤山獲物があつたので一先づ山林から引揚げて獅子の宅へ歸りまーたが其時獅子ハ驢馬に命令て其獲物の分配を爲せますと驢馬ハ畏りてこれを三ッに分けて獅子と狐の前へ差出ーまーて「サア各位何方でも好いのをお取なされ」と言ふと獅子ハ甚だ不機嫌な顏色で物をも言えず驢馬に食てかへり寸々に引裂きまーた、ソコデ獅子ハ改めて狐に向ひ「汝其肉を分配ろ」と命令ますと狐は「ヘイ〜〜領承まりまーた」と以前の三ッヨ分配てあるのを一塊ヨーて其中から自分の分配と思つて些少の肉を取除け殘餘ハ殘らず獅子の前へ差出ー「是で宜ーうございますか」と云へば獅子は悅ばーき顏色で「如斯正ーい分配法を誰が汝ヨ敎へたぞ」と問ひまーた狐は「ヘエ、ナニ私は驢馬の薄命ヨ敎へられまーた

能く他の不幸を解そものは幸福に遇ひます

○第九十九譚　兎と獵犬

獵犬が一頭の兎を見つけ暫時追駈けまーたが到頭兎が脱のびまーた其時一人の山羊飼が獵犬の立歸るのを見て笑ひながら「兎ハ小形が獵犬より駈けるのハ迅速なア」と言ひますと獵犬は腮惡く思ひ「ナイ〳〵山羊飼サン此方は餌食にするが爲めに駈け、彼方は命限りに駈けるのだゼ

何事でも命をかけてする事は強いものです

○第百譚　盲人と狼仔

或盲人が自分の掌上に載せられた活物を考へて其を言當るを自慢して居ますと或人が狼仔を持て來て是れは何だと尋ねまーたスルト盲人ハ掌上へ載せて撫たり摩つたりして胡亂な顏色をして「汝の親父は犬だが狼だが知れぬ　ちかー汝には群羊の番をまかせてハおけぬワイ

惡性質は幼年の時から解るものでございます

○第百一譚　驢馬と蟲螫

驢馬が或時蟲螫の唱ふのを聞きア、美い聲だなア吾も如彼聲を持ち度ものゞと蟲螫にむかひ「何んと妙なことをお尋申すやうだが汝ハ何を喰べて、うんな美い聲をお出ーなさる」と云へバ蟲螫ハ「ナニ別に是れと云ふ甘いものを喰べて居るのでハありません私ハ露ばかり啜つて居ます」と答へたゆゑ驢馬ハ己も以後ハさう仕樣と毎日露ばかり嘗めて居ると程なく飢て死まーた

自分を知らぬハ愚の至りです

○第百二譚　歳神と猿

或時歳神からあらゆる野山の獣類に布告が出まして何獣にかぎらず立派な兒を産んだものには褒美を取らせるとのことに一疋の母猿は他の諸獣と共々罷り出て宛も温柔な動作をして肩より小猿をおろし神の御前に差置きイザ御褒美を賜はりたいと願ひました其時諸の獣は如何に立派な兒かと見れば鼻の低い頭の兀げた不恰好な猿でまたから皆々ドット笑ひましたスルト母猿は臆したる氣色もなく嚴然四邊を見廻はし「歳神様は妾に御褒美を賜はるか賜はらぬか其は知りませぬが此兒は此母の眼から見ますと誰れに比べても愛らしく如何にも立派でございます」と申立ました

我兒を思ふ情は皆な此母猿と同じことでございます

○第百三譚　犬と殼蠕

鷄卵を喰ひ慣れた犬が殼蠕を見つけア、大きな鷄卵だなと大きな口を開いて一呑に呑込みますと殼蠕だから堪りません犬は胃を痛め大きに苦みましたが漸々氣が付いて「アヽ私は胃を痛めたはウダ何んでも丸いものは皆な鷄卵だと思ふ位な馬鹿だもの

能く事物の道理を考へないで一呑みにしてかゝるものは思ひもよらぬ禍難に遭ふものです

○第百四譚　獅子と鷲

一羽の大鷲が空中より舞ひ下り獅子にむかひまして「ナント御互の利益ダから同盟をして懇親をまやうでは御座らぬか」と云ひますと獅子は暫時考へて居ましたが「私はお前の信實を洞見まして同盟のことは御免を蒙りませう斯う申すと妙なことを云ふ奴ダと御推量もあらうが若しお前さんが彼奴との同盟はモウ止に仕度と思ひなさると其時には御勝手次第に驚して空中へ飛んで行てお仕舞なさる

ことが出來るからのことでございます

汝が信用する前に先づお試みなさい

○第百五譚　獅子と狼と狐

或る獅子が考衰〜て疾病に罹り洞穴の中に臥て居ますと種々の獸が冠蓋掩門見舞に參り此中に狼も居りま〜て他の獸に悉皆參りま〜たかと尋ねますと狐ハ未だ不沙汰を〜て居ると答へま〜たソコデ狼ハ好機會と心得狐の事を百方と讒訴て「大王、陛下ハ總獸類の首頭と〜て何獸と雖ども尊崇ないものハ御座りません然るに彼の狐臣は今日迄も陛下の御安否を伺ひに參らぬとは怪〜からん不忠もので御座います」と云つて居るところへ調度狐が見舞に參りま〜た今ま狼の云つて居た詞の一端をナヲりと小耳に狹みま〜たから心の中に狼を恨んで居ま〜た、ソコデ獅子王ハ狐の顏を見ると大層立腹の樣子でで

きいますから狐は大ゴ恐れ如何にも〜て不沙汰の言譯をまやうと殊更聲を温和れ〜「イヤ大王小臣程、陛下を御按思申すものハ御座ませぬ私は先般陛下の御病氣と承り何卒一日も早く御快方に赴かせられんことを願ひ此程より彼地此地と奔走いた〜漸のことで良い醫者を尋ね出し〜陛下の御病氣を治す良藥を聞て參りま〜た」と述ますと獅子ハ「成程左樣な事情であつたか」と少〜機嫌を直〜「ろれでは早く其藥法を云ふて聞かせ〜」とのことに狐ハ傍を見送り「イヤ藥法と云ふも別儀でハ五座りませぬ第一に狼を生ながら油煎に〜て召食られ第二に狼の剝立の生皮を御身に纏ひ給へ斯くするときは如何なる御難病といへども即座ゴ御全快疑ひなし〜」と述べま〜たので獅子王は狐の奏聞の終るや否や前に居た狼に飛びかゝり全剝に〜て其皮を身に纏ひ其肉ハ油煎にして食ひま〜た其時狐ハ狼の方を顧て苦笑を、

志ながらもヤフ、ン汝は大王の御機嫌を善く取つて居たナ
讒訴などをするものハ其身に禍難を受けますから深く注意て居
なければなりません

○第百六譚　薔薇と鷄頭

或る花園にて鷄頭が薔薇にむかひ「ア、貴女ハ愛ら〜い、たから神様
にも人達にも寵愛をお受なさる誠に貴女のお美麗のと貴女の佳香と
ハ御美ま〜い」と云ひますと薔薇ハ微笑を含み「マア〜鷄さんのお
嬲りなさることわいナ私は實に暫時の間榮へるばかりで御座います
假令虐い手が出て私を摘取らないにこたところが私の早逝ハ天命で
御座います、夫に引換へ貴君ハ永久間枯るの萎むのと云ふ事もなく
後から〜咲添へてハ何時までも、お若う、お榮へあさいます誠にお
目出度ことではありませぬか

榮華ハ一時のことで質素を永久間續きます

○第百七譚　踊る猿

一諸侯が、踊を教へ込んだ猿を數疋飼ひ給ひ〜が猿た其性質自然に
人眞似を能くするものゆへ或る日其猿どもに立派な衣裳を着せ種々
の假面を被らせ猿狂言を催されて衆庶に拜觀を許されま〜たところ
猿の俳優然たる藝を見て皆々興に入り喝采の聲、引きもきらず皆な
感心〜て居ま〜たソコデ、此席に居た侍從の一人が猿に褒美を與へ
んと袂から胡桃一掴を取出〜何心なく舞臺の上へ投出〜ますと猿共
ハ、これを見ると踊のことハ打忘れ假面ハ打破は〜衣裳ハ抓裂き其
本性を現〜ま〜て相互に引掻き合ひ、むし〜り合ッて胡桃を相奪ふ騒
動となり見物人も皆々興を、さま〜笑ふもあり罵るもありて哄き噪
いで踊も其ま、廢止になりま〜た

猿猴に冠との諺は此の事です

○第百八譚　兎と狐

或時兎どもが鷲と大戰爭をはじめ是非とも勝利を得たいと思ひまして評議のうへ狐に援兵を賴みまゝた其時狐ハ篤と考へ「我等若し貴君ハ何某殿で御座つて又た敵ハ何某で御座ると申す事を知らずに居ましたら歡んで御味方を致したで御座りませう」と答へまゝた事物は實行する前に其價値を考へねばなりません

○第百九譚　鷲と鳶

或る鷲が鳶とならんで樹の枝に止まり何か物思をして居る樣子でございますから鳶ハ鷲に向ひ「汝ハ私に如何いふ譯か大層御心配の樣子に見ますわ」と云へば鷲ハ「イヤ別儀でもございませんが私ハ私に適當た匹偶を欲く思つて居ますが如何も未た見當らないので苦勞

をして居りますのサ」と答へます鳶ハ「夫じや幸い私を匹偶にして下さいナ私ハ汝よりハ餘程强う御座ますセ」「それじやア私ハ物を攫去て生計を立てゝ居ますが汝も夫れが出來ませうか」「左樣サ私には是れ御覽なさい如斯爪がありますから此爪で駝鳥を引攫んで來たは度々で御座いまゝた」と聞き鷲ハ夫は左樣だらうと考へ「左樣なら何卒壻になつて下さいまゝ」と茲に相談が濟ひますと鷲ハ直樣鳶にむかひ「サ御約束ダから飛て往て例の駝鳥を攫で御出なさい」と云はれ鳶ハ「イヤ、モウ御約束だから」と勢よく虛空遙かに飛去りまゝたが頓て歸て來て獲物を鷲の前へ差出まゝた鷲ハ能く〳〵見ますと幾日も野曝しに逢ひ形も崩れかゝつて鼻向もならぬ鼠の死骸でございますから鷲ハ大に怒り「是は腐た鼠でハないか汝約束が違ふぜ私を馬鹿にするれも程がある」と詰りますと鳶は平氣な面色で「私は貴下の

婿になりたかつたから出來ぬを知りつゝ約束をまたのです

人と約束をするには其人が如何な事を言はうとも其が全く出來るか出來ないかと云ふことゝ能く確めて約束を爲ないと後で爭論が起ります

○第百十譚　狼と狐

或時狼が出産しますと其嬰兒は追々生長するに隨て身体も大きく力も勝れて強く狼の内では誰も及ぶものがありませんから狼共がこれを獅子と崇めて居ましたスルト增長してズット獅子氣取になり寧ろのこと同類を見限て獅子の群中に入らうと其心算で居ますと老猾た狐が其ことを聞出しまして「ヲイ狼獅子さん汝ハ大層自惚れて居るやうだが其樣馬鹿氣た了簡ハ私などには出ないぞ汝ハ狼の仲間に居れバでも獅子ダが獅子の仲間入をして見なせへ相も替らず狼ダア田舍に居て先生〳〵と崇められて居る人が都へ出ると左樣崇められない人もあります

○第百十一譚　獅子と兎

或る獅子が餌食を探ねて一疋の兎が好く睡て居る所へ來かゝり些細な獲物があつたぞと之を捕らうとする途端に綺麗な兒鹿が何處からか出て來たゆゑ獅子ハ此方が餘程大きいと其兒鹿を追駈けました其時兎はあたりの騒がしさに眼を覺し此の体を見て早々何れへか逃行きましたが獅子は鹿の脚の迅さにトウ〳〵途中で見失ひ復た以前の場所へ歸ッて兎を捕らうとまいましたが是れも逃去て居りませんので獅子ハ一も取らず二もとらず頻りに歎息して「エ己れが餘り慾張つたから如斯ことになるのダ大きな方を捕らうと思つたから手に入れて居た小さい方まで一緒に逃して志まつた

餘り强慾を出〜ますと得て仕損なひます

○第百十二譚　樺木と歳神

或日樺木が歳神にむかひ自分の不幸なことを歎きまーて「私共は何時とても安心ハ出來ません唯だ命を繋で居るばかりで外々の樹とくらべて見ますれバ誠に斧が危殆てなりません」と云へバ歳神は「今ま汝等が不幸だと言て歎息するのは汝等の身に取てハ甚だ悅ぶべき事であるも〜汝等が良き柱ともならず工匠の需用にもならぬ材木であるならば誰も斧を打込む者ハあるまじ人間の要用とありてこそ世にあるものゝ幸ひなれ」と懇ろに諭〜まーた

世の用を爲〜て斃るゝは不能に〜て永く此世にあるに勝ります

○第百十三譚　狼と狐と猿

或狼が猿王の法庭へ「狐は私の品物を盜取りまーた」と訴へ出ますと

猿王ハやがて裁判を開き狐を呼出〜て審問を遂ますと狐は「イヤ狼の訴訟は全く無實の事で私〜は彼の品物を盜んだことはございません」と返答に及びまーたソコデ猿王ハ原被告の申分を聞き終り早速裁判を宣言まーた其宣言ハ曰く「狼其方は品物を狐に盜まれ〜と申立れども決て其方が盜れ〜にあらず、又た狐其方は決〜て品物を盜んだことはないと申立れども其方が盜取たに相違な〜」と

常に不正の行爲をなす人は遇々正直の行爲があつても何人も其人を信用ないから決〜て不正な事はするものでない

○第百十四譚　鼠と野牛

或る野牛が鼠に嚙みつられ其傷が痛みますので野牛は憤怒を發て何んでも彼奴を捕へて復讐をーて呉れなければならぬと思ひ頻りに探〜まーたが鼠は早くも逃失せて小さな穴の中へ隱れて仕舞まーた、

うこで野牛は口惜く思ひ例の角を以て鼠の隠れた穴のある壁の下を堀りまゝたが穴は深くて中々角が屆きません其の中に精が尽て大きに疲れまゝたゆゑ穴の邊りでツイトロ〳〵と寢入ますと鼠は穴の中から樣子を伺ひチヨロ〳〵と出て野牛の腰と思ふ所を恐〳〵噛み付け復候穴へ逃込みまゝた其時野牛ハ思はず起上りギヨロ〳〵見まはゝて居ますと鼠は穴から首を出ゝ「形は小さくても傷害をさせると大層強ひ時節があるぞ

小さいものでも大きなものに勝つことがございますから侮りてはなりません

○第百十五譚　獅子と羊飼

一頭の獅子が森林の中を彼方此方と駈廻るうち蹄乃裏に踏刺を〳〵またが自分で引き拔く譯にもゆかず漸つと羊飼の家で出て來て「踏

刺で難儀をいたゝますゆゑ如何か助けて下され」と尾を垂て居ますから羊飼は氣の毒に思ひ「夫れは困却るだらう」と蹄の裏を改めると成程刺が立つて居まゝたから其脚をウント自分の膝へ載せ難なく刺を引拔て遣りますと獅子はヤレ〳〵是れで安心〳〵まゝた大きに難有ございますと一禮を述べ悅んで山の奥へ歸て往きまゝたサテ其後羊飼は或事で無實の罪に陷され生ながら獅子に食せるといふ裁判の宣告を受まゝたがやがて裁判官は羊飼の這入つて居る檻倉へ一疋の獅子を追込みまゝた咄嗟羊飼は一噛と思ひの外獅子は如何にも温良く還て尊敬にする樣子でやがて自分の脚を羊飼の膝へ載せ馴〻〳〵去て居りますゆゑ刑吏は不思議に思ひだん〳〵理由を尋ねますと此獅子は前に羊飼に踏刺を拔て貰つた獅子と分り又た羊飼の罪狀ハ誣告であつたことも解り獅子は元來の森林へ返〳〵羊飼も無罪となりて放

免れまゝた

因果應報とは此の事でございます

○第百十六譚　漁夫と小魚

或漁夫共が打寄て御〜てある網を引揚にかゝりますと其手感が重ひので大層魚が罹つたを悦びやうやく濱へ引揚げますと魚は一尾も居ないで砂と石ばかりでございまゝた皆な〜大きに力を落〜ますと其中の老人は之をなぐさめ「コレ皆の衆落胆ぞ〜己らが考へると悲哀みと歡喜とは丁度攣の樣なもので續て出て來るものぢや今ま己達を歡ばせることがあつたかと思ふと直に又た哀がらせることが出て來たのじや

世の中は歡喜ばかりはありません悲哀もあります喜びと悲しみは常に離れぬものでございます

○第百十七譚　驢馬と園夫

或る園夫が驢馬を追て居ますと如何〜た拍子か驢馬が一目散に駈け出〜路を横切て山の斷崖の方へ飛んで往ますから園夫は大きに狼狽へ追駈て驢馬の尾を握り後へ引戻さうと〜て驢馬は勢強くあか〜、力に及びません、そこで園夫は憤怒を起て握て居た尾を突離〜まして「エー呆痴め汝の勝手に仕やァがれ

餘り強情を張るものは後悔することが多いものでございます

○第百十八譚　童兒と蔵

或童兒が野邊で遊んで居るとき蔵に觸つて手を刺され阿母の所へ駈て來て「阿母さん私が温柔と蔵に觸はると其れが私の手を痛く刺〜まゝた」と云ふと母親は「汝それは汝が温柔と觸つたから刺れたんだョ後來汝が蔵に觸るなら強くお掴み、さうすると刺されるものじやア

ないョ

人は何事を爲すにも勢力を用れねばなりません

○第百十九譚　狐と蝟

或る狐が河を徒渉するとき漸々水勢が烈〳〵くなつて狹い谷間へ這入押流され出ることが出來おくなつて苦んで居ますと數千疋の馬蠅が寄て來て狐の滿身にたかりました其時通りかゝつた蝟が此體を見てア、可憐だと思ひ「汝を苦めて居る馬蠅を逐散ら〳〵て遣らうか」と云ひますと「狐は頭を掉り「何卒左樣なことを〳〵て下さるナ」と一向嬉がりませんから蝟は可笑ナ事と怪み「お前は奇妙ナ事を言ふ獸ダなア」と笑ひますと狐は「今ま私に止まつて居る馬蠅はモウ腹が張て居るから此上澤山血を吸ふ筈はありません、ところを若〳〵汝が此蠅を逐て御覽なさい又た新たの蠅が來て私の滿身の血を一滴もなく吸てもふかも知れないよ

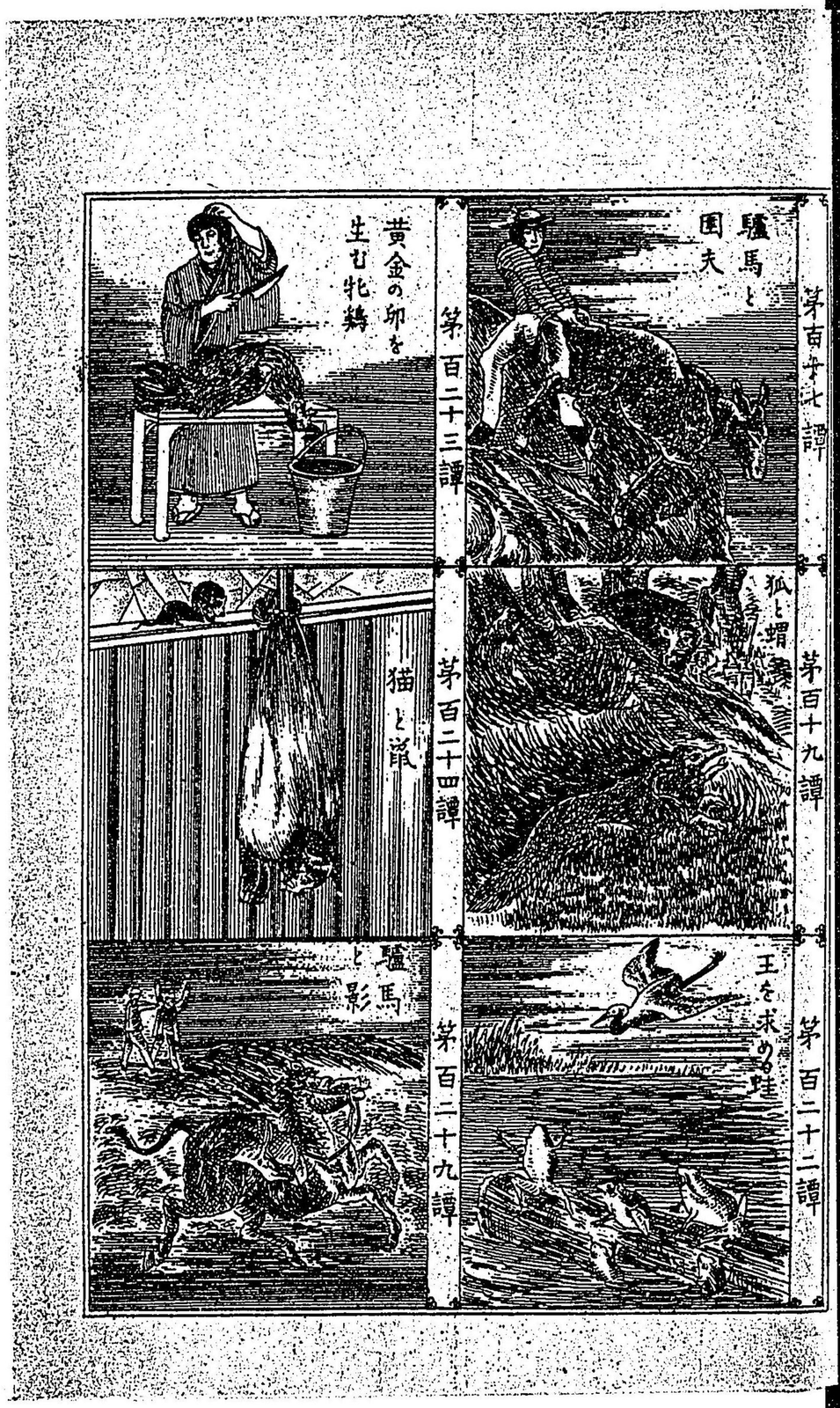
○第百二十譚　獵師と漁夫

獵人が澤山獲物を提げて山から歸て來る途中で魚を澤山入れた魚籃を持て家路へ急ひで往く漁夫に行合ひますと獵師は魚の料理が食べたいと思ひ又た漁夫は獸肉の美味にありつきたいと思ふ折柄相談がついて相互に其獲物で交易まゝたが是が緣となり其以來は毎日のやうな獲物の交易を〳〵て居るのを或人が聞き彼の人達は日〻食物の交易を〳〵て居るが今に口が馴れて又た自分のものが食たくなるだらう

免角他人のものは甘いやうに思はれ美ひやうに見えるものでございます

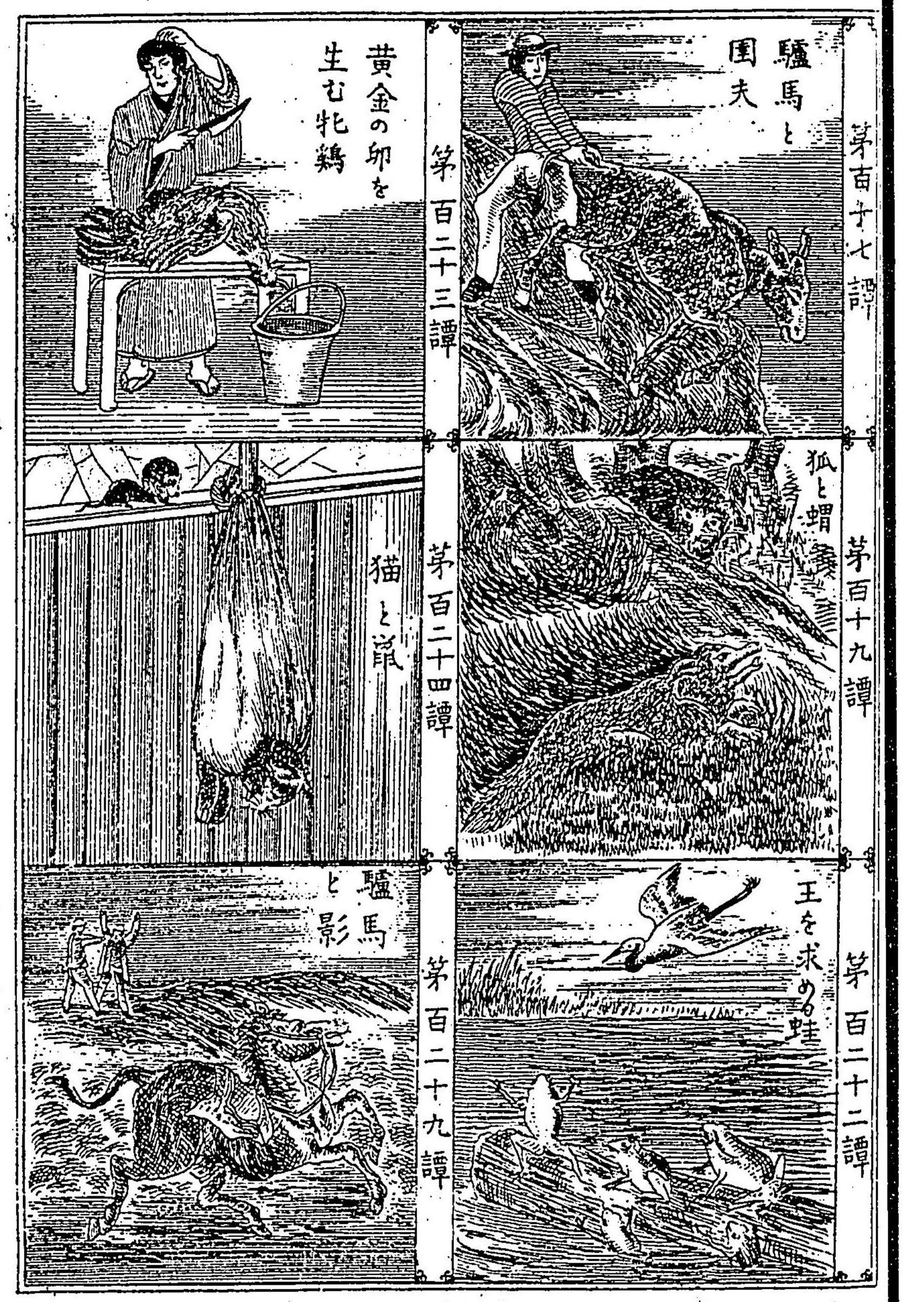
○第百二十一譚　驢馬と主人

草賣に飼はれて居る驢馬が碌々食物も當がはず毎日休みなく使はれ



ますので歳神様へ祈願を掛け「何卒此辛苦を救ひ給ひて他家へ奉公替を爲せ給はれ」と祈りますと歳神「汝の祈願の通り他家へ奉公替を致させ遣はさん後悔することなかれ」と嚴〳〵く御諭あつて瓦師の家へ遣はされまーた、うこで、驢馬は以前より尚ほ重ひ荷物を挽かせられ骨が折れて堪らぬゆゑまた歳神へ祈願を掛け「何卒此難儀を救はせ給へ今ま一度奉公替を許させ給へ」と祈りますと歳神又た現はれ「兼て後悔すること勿れと命令おきたるに又も我儘を申〳〵出たるよな此上へ如何なる祈願を爲すとも聞入れぬぞ」と今度へ革工へ遣はされまーた然るに驢馬へ主替をする度毎に段々運命が惡くなり苦勞が重るのみで、でざるすから或日長大歎息て「嗚呼々々吾れほど運命の惡いものへ此世界にはあるまい以前の主人に奉公〳〵て居たのが一番好つた吾か此節勤めて居る主人へ生て居るうち殘酷使うばかりで

ますので歳神様へ祈願を掛け「何卒此辛苦を救ひ給ひて他家へ奉公替を爲せ給はれ」と祈りますと歳神「汝の祈願の通り他家へ奉公替を致させ遣はさん後悔することなかれ」と嚴〜く御諭あつて瓦師の家へ遣はされまーた、うこで、驢馬は以前より尚ほ重ひ荷物を挽かせられ骨が折れて堪らぬゆゑまた歳神へ祈願を掛け「何卒此難儀を救はせ給へ今ま一度奉公替を許させ給へ」と祈りますと歳神又た現はれ「兼て後悔すること勿れと命令おきたるに又も我儘を申〜出たるよな此上ハ如何なる祈願を爲すとも聞入れぬぞ」と今度ハ革工へ遣はされまーた然るに驢馬ハ主替をする度毎に段々運命が惡くなり苦勞が重るのみで、ござゐすから或日長大歎息て「嗚呼々々吾れほど運命の惡いものハ此世界にはあるまい以前の主人に奉公〜て居たのが一番好つた吾か此節勤めて居る主人ハ生て居るうち殘酷使うばかりで



なく死だ後では皮を剝て使はれます

苦勞をするも上帝の命令で、ございますから免れやうと思つても

も決〜て左樣はなりません勤めるのが第一で、ございます

○第百二十二譚　王を求むる蛙

或る古池に住居て居る蛙共が互ひに我儘を言募りま〜て度々爭論の起るところから或る日集會を開き是では迚も治まりがつかないから管理者を神より授けて貰ふの外はないと漸々評議一決〜て諸共に天を仰き「何卒我輩を管理せらるゝ善き王をお降〜給はれ」と願ひを掛けますと天神忽ち感應ま〜〜て一本の丸柱を投下〜給ひま〜た然るに其の水中へ落ちて波を揚げた音ハ雷の樣でございま〜たから仰で祈願を込めて居た蛙共は胆を潰〜忽ち泥の中へ其身を隱〜息を殺〜て居ま〜たが何時迄待ても何も替つたことがないので一疋の蛙は

少〜泥の中より首を突出〜樣子を伺ひますと雷の樣に音が〜たのハ神より王を降〜給ひたることが知れ、去らば王は如何程の器量があるか試〜て見ん」と恐る〜其柱へ近寄り行くと他の蛙共も追々に浮み出て柱の側へ寄りま〜たが元來無心の木でございますから蛙は次第に恐怖を忘れ後にハ王の上ゑ跳上り我儘を働いても王ハ更に構ひませんので斯な温柔ひ氣力のない王でハ又〜同類で爭論の斷間ハあるまいと再び天を仰ぎ「何卒他の氣力のあつて我輩同類の爭論を制めるやうな王を授け玉はれ」と願ひますと天神ハ不埒な奴等が願ひかゐ」と鰻を降〜給ひま〜た、うこで、蛙共は今度の王ハ如何な氣力を持て居るかと前後左右から寄てたかつて伺ひますと是れも温柔性質と見へ唯だノタリ〜と〜て居るゆゑ是れでハからぬと又〜天神にむかひ「今少〜活潑な王をお授け下され給はゞ此上ハ異儀申間

敷」と祈りますと天神は如何にも我儘を言ふ奴等かな」と今度は青鷺一羽を授け給ひま〜た此青鷺下界に降ると直樣蛙を取りはじめ次第〜に取つく〜後にハ其古池に一疋の蛙も見へなくなりま〜た

天の賦與を不足とするものは必らず天罰を蒙ります

○第百二十三譚　黃金の卵を生む牝鷄

或る家主と其妻が鷄を飼て居ますと其牝鷄は毎日黃金の卵を一ッづゝ生みますから夫婦の喜悅此上なくそれより夫婦が考へますには如斯ゐ卵を生むからには此牝鷄の腹中にハ黃金の大塊があるに相違ない毎日一ッづゝの卵を儲けるより寧そ其黃金の大塊を取れハ一時に大儲が出來ると忽ち牝鷄を絞殺〜て腹の中を穿鑿ゐますと更に尋常の鷄と違ひませぬので夫より後は日々一ッの卵も儲ることハ出來なくなりま〜た

濡手に粟を掴むやうな儲けを望みますと得て大損をするもので御座ます

○第百二十四譚　猫と鼠

或家に鼠が澤山居ますと猫がその事を聞、知り種々と工夫を付て其家へ這入り込み鼠を見付け次第に取殺し食事に不自由がありませんでまたが其時から鼠はモウ容易に出歩くことは出來ないと衆鼠相談のうへ穴の中へ閉籠つて仕舞ました、スルト猫ハ斷然食物に不自由をするところから何か手術を設けて彼奴等を取らねばならないと自分の身体を袋へ入れ首と足とを出て死んだ猫の吊してある樣にして架の腕木から倒懸にかつて居ますと一疋の鼠が是れを見附け「ナイ老猫さん假令ひ貴猫が美味の袋に變化たとて私共は決して寄附きハ仕ないセ

死んで居ても敵にハ油斷がありません

○第百二十五譚　盜賊と母

小兒が學校で其同生の讀本を盜んで家へ持歸りますと其母ハ手癖の惡いのを叱りもせず還てお前ハ働きがあるなどゝ譽めました其後此小兒は又〻或人の鳶合羽を盜んで持歸りますと母ハ益〻賞ますので小兒ハいよ〻〻附あがり追〻惡事が增長して生長なるに隨れ貴價のあるものさへ盜む樣になりましたから到頭裁判所の手に罹り刑場に引かれました其時此惡人の處刑を見物せんと群つて隨て行く人々の中に其の母も居て最後を見屆け念佛を申さんと泣て居るを盜賊がチラト見附け警衛の役人にむかひ「彼所に居ますのが私の母ですから何卒最後の一言を演べさして下さいまし」と願ひますと直ぐに許されれ母の傍へ行りますと母ハ悲歎の中にも喜んで「何事を言置くぞ」と

耳を口元へ差つけますと忽ち其耳を喰切りまして、そこで母親は痛苦を堪らへ「此不孝者め何をあやアがる」と咎めますと盗賊は怨めしげに「私が初めて讀本を盗んで來たときお前が私を打擲て呉れゝば如斯不運にも遇はず如斯死樣はあませんものを

惡事ハ直に成長〜ますから嫩芽のうちに鋤とつて仕舞はねばなりません

○第百二十六譚　豹と狐

或る所で豹と狐が出遇ひ四方山の話の末狐ハ「豹サン何どお前と吾は孰がよい獸だらう」と問ひかけますと豹ハ自惚れるやうだが毛の斑紋などを以て見ると私が好ひ獸サ」と答へまして狐は苦笑を〜て「ハヽア左樣云ふお考へですか、あか〜私の考へでハ心の慧敏方が何かに付けて益があると思ひます

容姿の氣麗なのを美人と云ふのは世間一般のやうでございますが心の奇麗なのハ是れが眞實の美人でございます

○第百二十七譚　驢馬と雄鷄と獅子

或時驢馬と雄鷄が農家の庭先で何か話を〜て居ますと獅子が其處へ通りかゝりあの驢馬めを餌食に〜てやらうかと立留りますと雄鷄が一聲高く鳴ま〜たから獅子ハ鷄の聲を聞きますと直に怖氣が出るもので飛で逃出〜ま〜たを驢馬が見付け平生己等を驚ろかす獅子めを追かけて遣ふと急に駈け出〜ま〜たが未だ二三丁も往かないうちに獅子は忽ち取て返へ〜瞬間時に驢馬を喰殺〜ま〜た

信用を誤るものハ動もすれば危難に遭ひます

○第百二十八譚　羊飼と海

或る羊飼が海岸に近いところで羊の看護を〜て居ながら彼方此方と

望見て居ますと海面には微々の風もなく至極隱かでございますからアノ上に舟を駈らゝたらサゾ精神が快からうと思ひ付き、ろれより飼羊ハ殘らず賣拂ひ夫れで襤子を買込み舟仕度をゝて出帆ゝまゝたゝて大海原へかゝりますと俄かに颶風が吹て來て浪ハ白馬の猛り狂う有樣で船ハ忽ち覆へりやう〳〵一枚の板に助けられ命から〳〵で歸つて來まゝた、其後間もなく或人が尋ねて「ア、何んと海面ハ靜穩だなア」と言ひますと羊飼ハ「汝さうおつゝやるが如彼柔和顏をゝて居ても中〻油斷ハなりませんアリヤア汝の襤を目がけて居るのだゼ

柔和な顏色をゝて居るものは兎角油斷がなりません

○第百二十九譚　驢馬と影

夏の極熱日に一人の旅人が甲の地より乙の地まで驢馬を雇ひ乘て行きます、と日中になつて惣身が煨ける樣に思はれますから旅人ハ鞍の上にも堪りかね何處で休息たいと思ひまゝて驢馬から下りて左右前後と見まわゝまゝたが廣い野原で物陰はなゝ暫時思案ゝて居まゝたがハタと手を打ち宜ひ休息場があッたと驢馬の立て居る影へ這入り込ますと驢丁も「ウン是れハ宜い休息場ダと同じく其處へ這入りまゝたが驢馬の身体だけでは二人の影には六ケ敷ところから驢丁は「此影には已れが居るのが當然だアお前さんは退て下さいと云ひながら客人を追出さうと致ゝますスルと客人も中〻承知せず以の外憤怒を發て「何んだ此驢馬は已れが約束の所まで買切たのだ」ぞと云へば驢馬丁も憤怒と發て「さうさお前さんは驢馬を雇はゝやつたが吾や驢馬の影まで貸やアまおいぜ」と彼是爭論の果は腕力にもならうと云ふ大騷動に驢馬は面倒と思ひ二人に喧嘩をさゝて置て自分は搆

はずサッサと跑出～て行きま～た
人には謙讓の心がなければなりませぬ

新譯 伊蘇普物語目錄下 終

明治二十五年五月十二日印刷
明治二十五年五月二十七日出版
定價金十五錢

譯述兼發行者 大阪市東區安土町四丁目三十八番屋敷 鈴木常松
印刷者 大阪市西區江戸堀下通四丁目貳百壹番屋敷 大原政吉
專賣者 大阪東區安土町四丁目三十八番屋敷 積善館
同 福岡市博多中島町 積善館支店

版權所有
版權免許

大阪積善館新版廣告御披露

家庭教育はふし　全一冊　郵税共實價　金拾貳錢

家庭教育日本修身談　全一冊　郵税共實價　金拾貳錢

家庭教育修身はなし　全一冊　郵税共實價　金拾貳錢

家庭教育小學修身はふし　全一冊　郵税共實價　金拾貳錢

家庭教育幼年修身はふし　全一冊　郵税共實價　金拾貳錢

本書ハ德育智育躰育に關する種々の談話を讀み易く解し易く綴り且つ卷中に密畫を挿みたるものにして洵とに學術の博覽會教育の花園と謂ふ可し故に一度之を讀むときは修身の指南車開智の羅針盤育英の藥石となり實に家庭教育の良書籍なり

家庭教育小學生徒演說　全一冊　郵税共實價　金拾四錢

本書は百科學術の要を網羅し平易簡潔を旨とし目今社會に流行する演說体の口調を以て最も面白く最も勇ましく恰も眞正の演說を傍聽するが如き有樣に綴りたるものにして實に學術上の寫眞鏡家庭の良教師なり

家庭教育日本歷史はなし　全一冊　郵税共實價　金拾四錢

本書は遠く神代の時に起り明治二十三年國會開設の時に了る其間の政治、宗教、戰亂、文學、工藝、外交、風俗の沿革事物の起原等の事項を談話体の文に綴り何人にても讀み易く解しく且つ必要なる圖畫を挿みたるものにして實に明治の教育を受くる童男童女の必讀を要す可き良書なり

家庭教育萬國歷史はふし　亞細亞洲の部　全一冊　郵税共實價　金拾四錢

SEKIZENKWAN
OSAKA
大阪積善舘
發兌

特12
72

新訳 伊蘇普物語

国立国会図書館

100815-000-3

特12-72

伊蘇普物語（新訳）

鈴木　青渓／訳

M25

DBY-0059